
インフィニット・空我・ストラトス

郡司侑輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・空我・ストラトス

【Nコード】

N0938T

【作者名】

郡司侑輝

【あらすじ】

未確認生命体四号と呼ばれた戦士・クウガの変身者響輝羅。彼は何故か、女の園ISS学園へ……

この作品は声優ネタ・パクリネタ・やや原作ブレイクなど作者の観点で作成しております。

至らない点がございましたら、それは自分が至らないという事なので、そこら辺は温かく見守り下さいませ

プロローグ

「何なんだよ！一体！」

少年は、数人の黒服の男達に追われていた。捕まったら死。それが少年の脳裏にちらつく。

「これじゃあ、何の為に俺はグロンギと戦って来たんだよ！」

路地の曲がり角を曲がると同時に、誰かに建物の中に引き込まれ、同時に口も塞がった。

「大丈夫だよ？安心して」

その人物が呟くと、先ほどの黒服の男達はこちらに気付くことなく通り過ぎて行った。

「久しぶりだね。きー君」

「輝羅……^{キラ}響輝羅^{ヒビキラ}ですよ、篠ノ之束さん。ありがとうございます」

少年…輝羅は自分を救った人物：篠ノ之束に礼を言った。

彼女はののんと人差し指を横に振る。途端に彼女は真面目な表情になり、輝羅を見据え言う。

束「早速だけど、IS学園って知ってる？」

輝羅「あの、女子高の？」

束「まあ、大体は合ってる。実はそこに」

束の発した言葉を、輝羅は一字一句逃さず聞き入れ、驚愕する。
初春の春一番が、二人を撫でる様にふいたその日は、晴れだった。

続く

第一話 転入（前書き）

主人公設定

響 輝羅

誕生日 8月 2日

一人称 俺

未確認生命体四号と呼ばれた彼は、心のどこかで傷を負った。それでも彼は戦った。皆の笑顔を守る戦士・クウガとして戦った。特技は笑顔とハッキング。容姿と声は、SEEDのキラ・ヤマト似。専用機持ちで、ISの名はフリーダム。第四世代のISでワンオフアビリティーは不明。

第一話 転入

束さんに助けられた俺、響輝羅^{ヒジキヲ}は何と、女の園ISS学園に転入される事となった。束さんが言うには、そこに一夏がいるというから、安心できる。

でも、束さんの下で俺の専用機フィッティングやらなんやらかんやらで、実際の入学より遅れてしまった。
今俺は、一年一組の前にいるのだが……。

輝羅「君も、転入生？」

シャルロット「まあ、そんなものかな？君は、男の子だよねもしかして……」

輝羅「そのもしかしては当たりだ。俺の名は響輝羅。命の響きに輝く修羅って意味で名前が付けられたんだ」

シャルロット「そっか。よろしくね」

少し雑談した俺達二人は、山田麻耶先生に呼ばれ俺だけ先に教室に入った。

麻耶「転入生の響輝羅君です。仲良くしてくださいね？」

輝羅「響です！何分馴れない事もありますがよろしくお願いします！趣味は読書！特技は笑顔とハッキング！」

千冬「要らん事を言うな！」

ボコ！

突然俺は呂布^{りよぶ}…失敬。織斑千冬先生に出席簿で殴られた。当然だ。ハッキングは犯罪行為だ。

俺は紹介を終えると、クラスの反応を見た。うっわ、失敗した！

「き……」

輝羅「き？」

「「「きゃああああ〜！！」」」

「男よ！男！」

「神様、ありがとう！」

「しかもイケメン！！織斑君と負けず劣らず！」

どうやら成功したようだ。俺の視線の端で、馴染みのある顔を見付けた。

輝羅「久しぶりだな、一夏」

一夏「ああ、久しぶり」

輝羅「どれくらいだっけ？」

一夏「一年とも経たなかったからな。家もあそこか？」

輝羅「まあ、今の自宅は変わらずあそこだ」

一夏「とにかく、これからもよろしくな、相棒！」

輝羅「おうよ、相棒！」

そんな俺達に、数人鼻血を流している女子がいたが、敢えて俺は無視する。

麻耶「それと、後一人転入生がいます」

麻耶先生が言うと、クラスの女子がざわざわとざわめく。しかし、俺は気にしない。

扉が開くと、入って来たのはさっきの女子だった。

麻耶「実は……デュノア君は実は……デュノアさん……という事でした」

突然クラスの女子が騒ぎ出す。口々に一夏とルームメイトだった。夕べ一夏と大浴場使っていた。等と言う。

すると、隣のクラスからなんと俺と一夏の馴染み深い鈴こと、凰鈴音シエンロンが専用機だろうか、甲龍シエンロンを装備しながら入って来た。

鈴音「一夏あ、あんたって奴は！」

一夏「わわわ、待て、鈴！これには深い訳が……」

鈴音「問答無用！」

双天牙月……だったけか？東さんの資料に載ってたそれは、一夏を切り裂こうとする。

一夏「おわあああ！！！！」

が、その斬撃は一時停止するかの様に止まった。止めた本人はプラチナヘアーの…確かドイツの代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒが専用機シユバルツエア・レーゲンの慣性停止結界、通称、A I Cアクチオギンシャトルとやらを張り、一夏を守った。

一夏「さんきゅ、ラウ…むぐっ！」

突如一夏の唇をラウラが奪う。うっわー、一夏終わったな。
イギリスの代表候補生のセシリア・オルコット、俺と一夏の幼馴染みの篠ノ之箒、さらに先ほどの…シャルロットも一夏を集中的にボコった。

輝羅「生きてつか一夏？」

一夏「多分……」

休み時間。俺は席の隣の一夏の生存報告を聞き取り、読みかけのライトノベルを再び読む。

輝羅「しかし、寒い時代だな」

一夏「何がだ？」

輝羅「ISの登場で世界のパワーバランスが崩れた。尤も、俺は男

尊女卑だろうが女尊男卑だろうが関係ない。皆笑顔で暮らしてくれれば、俺はそれでいい」

一夏「笑顔……か」

セシリア「響さん、少しよろしくて？」

輝羅「君…は？」

俺はわざと知らないフリをして答える。データ上でしか彼女を知らないが、彼女は確か専用機持ちだそうだ。

セシリア「イギリス代表のセシリア・オルコットと申しますわ。以後御見知りおきを」

輝羅「こちらこそ、響輝羅です。いつも一夏がお世話になってます」

一夏「輝羅、おまえは俺の親か親戚か！」

一夏の言い分を流すと、セシリアは俺に問い質す。

セシリア「貴方、一夏さんと随分親しいそうですね。お知り合いですか？」

輝羅「知り合いも何も、幼稚園時代からの幼馴染みだよ。箒も鈴も俺の事知ってるだろうし」

セシリア「そうですか。所で、専用機は？」

輝羅「次の実践授業までの秘密だ！今のところ、教えてたらつまらないだろ？」

一夏「へえ、輝羅も専用機持つてんのか」

輝羅「まあな（つていうか、東さんから貰って、ここへ東さん名義で転入したんだよなあ…）」

すると、チャイムがなると同時に放送が入る。織斑先生の声だ。

千冬「一年生全員に連絡次の授業は急遽専用機持ちのコーポレーションマッチとする。全員着替え、第二アリーナに10分以内に集合！尚、遅れたものはグランド十周！>

一夏「やばっ、急ぐぞ輝羅！遅れたら一周二キロの十周だ」

輝羅「げ！それだけは避けたい！」

アリーナの更衣室は、俺と一夏以外は誰もいない。当然だ。世界ひろしといえど、世界でISを使える男は俺と一夏しかいないからだ。数分も数秒もしない内に着替えを済ませた俺達は一足先に、織斑先生の立っている第二アリーナのグランドに到着した。

輝羅「響輝羅、ただいま到着致しました！！」

千冬「ここは軍隊じゃないぞ」

織斑先生に軽く突っ込まれると、後方から同じ一年の連中が来る。中には箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの姿が見えた。つていうか、鈴って二組なんだな。

千冬「よし、集まったな。今日は、抜き打ちの専用機持ちのコーポレーションマッチだ。響、専用機を持っているな」

輝羅「はい」

右手にある青い腕輪。それが俺の専用機・フリーダム。俺以外に知っているのは、作ってくれた束さんと、今ここにいる織斑先生だ。しかも、俺の転入手続きの相手も何を隠そうこの織斑先生だ。早速俺は右手を高く挙げ、叫ぶ。

輝羅「輝け、フリーダム!!」

腕輪が粒子変換され、俺の身を包む。神々しい光が止むと、白い装甲、十枚の青い翼、両腰のレール砲、左手には少し大きめの盾、右手にはビームライフルがグリップされている。

輝羅「ふうううう……」

フリーダムを纏った俺はいつの間にか、甲龍とブルーティーズを展開した鈴音とセシリアがいた。

鈴音「あんななんか、一分も経たない内にやつつけてやるんだから！」

セシリア「今のうちに降参なさったほうがよくて？」

かつちーん。手加減してやろうかと思ってたが、叩き潰す。

輝羅「おっけ」

千冬「では、始め！」

織斑先生の合図と共に、フリーダム、甲龍、ブルーティアーズが宙を舞う。

俺の期待目掛け、ブルーティアーズのスターライトMark?の火が吹く。俺はシールドを掲げ、突っ込む。

セシリア「な、なんて無茶な！」>

輝羅「俺の辞書に、無茶って言葉は生憎記載されていないんでな！」

近付いた所で、フリーダムのレール砲が実弾を吹き確実にシールドエネルギーを削ぐ。

鈴音「私を忘れるなあああ！！！」>

おっと、素で忘れてた。とにかく、俺はあいつの性格を熟知している。

近づく甲龍を蹴り飛ばし、ブルーティアーズから放れバラエーナで双方を狙い撃つ。

セシリア「に、逃げ道が！」>

鈴音「ここしか！」>

セシリア& a m p ;鈴音<<ぎゃっ!>>

ビンゴ!予想通りごつつんこ!!

輝羅「さてと。神に祈ったか?次に笑顔になった時がお前の幸せつてな!」

五つの砲門から火が吹く。これが、俺の、フリーダム**の必殺技!**ハイマツトフルバースト!

迫る火線が甲龍とブルーティアーズの武装等を撃ち、シールドエネルギーを削る。ビームライフルを腰にマウントし、ビームサーベルを握り接近。残りのシールドエネルギーを零にした。

つてか、ここ空中じゃん!?やっべ、やり過ぎた!

飛行能力を失った二機は、意識ある二人と共に真つ逆さま。

俺はブーストを吹かし、二機に急接近。腕を取り、ゆっくりと下ろす。織斑先生から出席簿アタックを喰らう。

輝羅「セシリア、鈴、スマン!やり過ぎた!」

セシリア「い、いえ。挑発した私達がいけないんですわ」

鈴音「っていうか、何でそんなに強いのか?つかそれ第何世代?」

鈴が俺にそう質問してきた。そういえば束さん言ってたな。取り敢えず言っとくか。

輝羅「束さんが言うには、第四世代だなんとか」

鈴音「だっ...」

セシリア「第四…?!」

「「「第四世代!!!?」」」

一夏「輝羅、それって…」

輝羅「どうした?」

全員は啞然とした表情で俺を見る。勿論束さんの実の妹の筈でさえも。

輝羅「正直俺も分からん。束さんは『フリーダムは第四世代のISだよお!束さんてちょー天才!』って」

俺はそう真実を述べた。しかし、半信半疑の奴も数名いる。

次は、一夏& amp ;シャルロット対ラウラだ。これに関しては、筈と鈴とセシリアの他にその他の女子が羨ましげに二人を見ていた。実践ともなると、A I Cの凄さがハンパない。

学校が終わり、俺は寮の自分の部屋にいた。それは一夏と相部屋だった。荷物という荷物は、織斑先生が俺の家から持って来たケータイの充電器と着替え位だ。

一夏「俺の時と同じだな」

輝羅「無いよりマシだろ?そろそろ飯食うか」

一夏「ああそだな。ここの食堂の飯は美味いぞ！」

と、連れられて来たのはその一夏の言う食堂。そこには、俺を祝うかの様に横断幕で『ようこそ！輝羅君！！』と書かれていた。席に誘われ（一夏は言わずもがな）俺は腰を降ろす。

薫子「ではでは！転入生でありながら、二人目のISを扱う男子、響輝羅君にインタビューです。あ、私は二年の薫^{まゆがおるこ}薫子ね。新聞部に所属しています」

輝羅「ど…どうも」

勢いあるね、この先輩は。ICレコーダーを出した薫先輩は早速俺にインタビューする。

薫子「まず始めに、お名前と誕生日をお願いします」

輝羅「えっと、響輝羅です。命の響きに輝く修羅で響輝羅です。誕生日は、8月2日」

薫子「カッコイイ名前ね。ついでに興味と特技も教えてね」

輝羅「趣味は読書です。特に推理小説とライトノベルを愛読しています。特技は笑顔とハッキング」

また失敗するかなあ…。

薫子「ではその得意な笑顔をお願いできるかしら？」

輝羅「笑顔……ですか？」

取り敢えず、精一杯の笑顔をした。
カメラのシャッターを切る薫子先輩を筆頭にその他の女子（篤達は別）が詰め寄る。

今になって、俺は思った。束さんは、あいつらと戦った俺の心の傷を癒す為に、こんなことしてくれたんだな。

続く

第一話 転入（後書き）

次回

臨海学校を数日に控えたその日に、あいつらが復活した。

ゲゲルの魔の手が、クラスの皆を襲う。

そして輝羅は空我の力を解放つ。

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【復活】

第二話 復活

臨海学校を数日に控えた今日は、清々しい朝を迎えた。俺は一夏よりも早く起き、顔を洗う。

輝羅「ああ。朝日が心地好い」

じじくさい台詞を言った1時間後、一夏も目を覚まし食堂に行く。途中、俺を五度も押し退け箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラが一夏の近くを取る。

あたた…。何も五度も押し退けなくても…。

食堂に着いた俺は、ここに来てからの唯一の楽しみの焼鮭定食を注文する。昼はコーヒーが付いたから揚げ定食。夜は夜でカレーライス。ああ、飯が美味いと幸せだ。

鈴音「あ、またテレビに出てる」

鈴がテレビの画面を見てそういった。画面には有名アイドル園田魅緒だ。碧色のロングヘアがチャームポイントで、絶賛人気中。…
つていえばいいのか？

箒「確かによくよくテレビに出てるな」

一夏「CDもバカ売れ。ドラマやCMにも引っ張り風」

輝羅「最近じゃあ映画の主演にも」

鈴音「デビューしてまだ一年も満たないのにねー」

第、一夏、俺、鈴の順番で魅緒を事をペラペラ喋っていると、セシリアとシャルロットが訪ねてきた。

セシリア「というか、何故ご存知なのでしょう？」

シャルロット「そうだよ。もしかして、一夏って……」

俺は味噌汁を飲み干し、セシリアとシャルロットに言った。

輝羅「しってるも何も、俺と一夏と第と鈴の幼馴染みだよ。ご馳走様でした」

セシリア & a m p ; シャルロット「えええ!!」

ラウラ「それはそんなにすごいのか？」

セシリア「スゴイも何も、アイドルと幼馴染みって言うのは……」

シャルロット「ラウラでいう、織斑先生と昔から知り合っているって事だよ！」

ラウラ「きよっ、教官と!？」

輝羅「まあ、そんなもんだ。つかそろそろ食い終えろよ、時間大丈夫か？お先」

時間は授業開始まであと10分。俺は完食したはいいが、一夏達は半分も食べてない。

俺に指摘され初めて気が付いたのか、慌てて食べる一夏達は、ちょっと滑稽なもんだ。

時が進んで三時間目。

俺達のクラスは筆記授業で現在、現代文を学習中。この学校は、授業の殆どがISに関する授業でその他は数少ないと言っても過言では無い。

漢字は昔から強い方だ。日課の読書の賜物だなこれは。

「きゃああああ!!」

突然、校庭の方から叫び声があがる。山田先生が校庭を覗くと、また山田先生も悲鳴をあげる。

麻耶「ひいつ……!!……み、……み……」

続けて織斑先生も校庭を覗く。

千冬「っ!未確認……、未確認生命体は何故!」

輝羅「み、未確認生命体!?!」

千冬「山田先生、すぐに生徒を校舎内に。それと打鉄部隊を!」

麻耶「は、はい!」

輝羅「……無理ですよ」

そついった俺に織斑先生は質問する。

千冬「どうということだ？説明しろ響」

輝羅「あの未確認は一号です。奴の吐く糸で拘束されたらあとは、シールドエネルギーを削られ、殺されるがオチです」

千冬「ほう。それは、専用機持ちとしての意見か？」

織斑先生の言った事は半分合っていた。

俺は窓際まで歩き、窓を開ける。地上3階ともなれば、高いというものは高い。その窓の縁に脚を掛け、皆に言った。

輝羅「皆の笑顔を護るための発言ですから」

言った俺は勢いよく窓から飛び降り、空中で体勢を整え、地面に着地する。すると未確認生命体一号ことズ・グムン・バは俺に気が付いた。

ズ・グムン・バ「リントめ……ゲゲルの邪魔をするのか……」

輝羅「へえ。喋るようになったんだな」

ズ・グムン・バ「ゲゲルの邪魔をするのかと聞いている。答える！」

輝羅「ああ。答えるよ」

俺は腰に両手を包む様に当てる。すると腰からベルトが浮き出る。

ズ・グムン・バ「それは、クウガのベルト……！」

次に俺は、左腕を引き右手の指を軽く曲げ左から右に流し、叫ぶ。

輝羅「変身！」

両手でベルトのスイッチを押し、両手を下に広げるように下げた。ベルトを中心に、俺の体をリントの戦士、クウガ・マイティフォームに変える。

クウガM「答えは、ゲゲルをぶっ潰す！！」

ファイティングポーズをとった俺は迫るグムンを受け流す。前は白いクウガだったから逃したけど、今回はそうはいかねえ。

クウガM「ぜあっ！」

げしっ！

ズ・グムン・バ「がはっ！」

クウガM「もういっちょ！」

ぽかっ！

ズ・グムン・バ「っは！」

俺の放つ蹴りと殴りが、グムンに当たる。よろめき、後ずさるグムンに向かい、俺は走り出す。そして、その手前で飛び空中で一回転し右足を伸ばす。

クウガM「うおりゃあああああ！！！」

必殺技・マイティキックがグムの腹部に直撃。受けた部分には必殺技を受けた拍子に表れるクウガの封印のマークが浮かぶ。それを中心に、バツクルまでヒビが入り、到達しグムンは爆発する。

またこの力を出してしまった。しかし、このまま変身を解こうにも、生徒の皆様方に俺の正体がばれるな。尤も、一夏達の事だ。俺のもう一つの姿なんぞ間違っても誰にも言わないだろう。鈴を残して。人目のつかない場所にたどり着き、俺は変身を解いた。

一夏「輝羅、…お前…」

振り返るとそこに、一夏を筆頭に箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、山田先生、そして織斑先生がいた。

箒「どういうことだ。説明しろ！」

輝羅「説明もなにも、俺のもう一つの姿は、四号なんだよ」

一夏「じゃあ、突然引越したのも…」

輝羅「そ、この力を手にしたら、一夏達が襲われるって感じてな。それでだ」

言い終わると同時に、俺の胸倉をラウラが突然引っ捕らえる。

ラウラ「貴様、何故私の嫁に隠し事など！」

輝羅「言ったら何とかなったか？俺は……俺は……。分かるのか、おまえらに…自分自身が人間じゃ無い何かに変わってしまう恐怖が！」

それは事実だ。俺は古代のベルト・アークルを腰に巻いて、数々のグロンギと戦った。その中で俺は心に傷を負った。

輝羅「わからねえだろうな。度々見るレントゲンに写る腰のアーケルに繋がった神経、通常の人間より早い治癒力……」

千冬「お前は何だ？」

輝羅「え……」

突然言った織斑先生のその言葉が分からなかった。
俺が何だって？

輝羅「俺は……」

千冬「四号か？怪物か？ヒーローか？違うだろうな」

一夏「…輝羅」

第「輝羅！」

鈴音「輝羅」

セシリア「響さん」

シャルロット「輝羅！」

ラウラ「響！」

一夏達は俺の名を言った。俺の名は響輝羅。命の響きに輝く修羅と

親父がそう言う意味で俺に名付けた。

輝羅「……俺の名は響輝羅。それ以上でもそれ以下でも無い。それーに、四号じゃなくてクウガ、な？」

俺は皆を見て、自然と笑顔になった。

ここに在一夏を含めた八人と、東さんは四号^{クウガ}俺を受け入れてくれた。

「ここが日本でござるかあ？」

日本のとある空港。そこにいたのは一見年端もいかぬ少女だった。彼女はカウンターにパスポートを提示する。

「御旅行ですか？」

「いや、転校……でござるよ」

その少女の名はカナダの代表候補生である、メアナ・ノート。彼女は印が押されたパスポートを受け取り、ゲートを通過する。

メアナ「待つてるでござるよ、IS学園」

彼女の首にあるチョーカーは、IS「ダークネス・ファントム」《暗黒の幻影》の待機状態。
それが彼女の専用機なのだ。

続く

第二話 復活（後書き）

次回

臨海

第三話 臨海

っあゝ。今朝はホントに災難だった。

何故そうなのかと言うと、朝俺が普通に起きたら、隣の一夏のベッドに一夏以外の何かの膨らみがあった。

勿論俺は絶叫し、続けて一夏も起床 & amp; 絶叫した。それにより、その膨らみの正体「ラウラが一糸纏わぬ姿で降臨。ちゃんと大事な部分は髪の毛で隠れていた。

しかも誰だよ、彼女に間違った日本常識を教えたのは！

そこに一夏を朝食に誘おうと筈が入出。後は御想像の通り、三人には織斑先生からお叱りを受けたのだ。

俺？俺はさつさとトンズラして、こうして朝飯を頂いている。

輝羅「味噌汁が旨い。日本人でよかったあ……」

そついった俺は、清々しい笑顔を青空に向ける。

と、校門の近くでこの学校の制服を着た女の子がいた。

輝羅「（転校生……なのか？迷ってるみてえだし……行ってみるか）」

「ねえゝ、びつきゝ。相席してもいいかなあゝ」

輝羅「あり？あんた確か……野仏本音……だっけか？」

のほほん「せいかあい！」

俺をあだ名で読んだのは同じクラスの野仏本音。通称のほほん。一夏も彼女を知ってはいるが、あだ名でしか覚えていない。

輝羅「別にいいけど、俺もう食い終わつたし、後はお茶飲む位だぞ」
のほほん「別にいいよぉ」

食後、俺は校門近くに行つた。まだあの女の子迷つてるようだな。
取り合えず、行ってみつか。

輝羅「君、この学園の生徒？」

すると、その娘は俺を見ると微笑ましい限りの笑顔で俺に問い掛ける。

メアナ「不躰な質問で御無礼かも知れぬが、転入手続きは何処でござるか？」

輝羅「……転校生……かい？つていうか今時珍しい侍言葉だね」

メアナ「手前はメアナ・ノート、カナダ生まれのカナダ育ち。今月15になつたばかり、諸々の事情で飛び級で転入いたし候。趣味は日本刀集めにござる」

と、飛び級ってありなのか！？あつ、でもカナダやアメリカだったら当たり前か。しかし日本刀集めか、箒といい勝負だな。

輝羅「じゃあ案内するよ」

メアナ「本当でござるか？！」

また微笑ましい笑顔を俺に向けるメアナ。クウガとして戦つた褒美というのか、笑顔というものは何物も変え難い。俺の守つた笑顔の

中に、この子の笑顔も入っていたんだな。

そして、待ちに待った臨海学校の日。バスの中はまるで修学旅行へ行くかの様だ。その騒がしい中、一夏はセシリアと何かを話しているが、俺は関係ない。

メアナは三組に編入し、休み時間になればたまに俺に会いに来る。俺を兄と呼んだり、箒を姉と呼んで親しんでいる。箒も箒で、趣味が共通しているせいかな仲もいい。まるで本当の姉妹みたいだ。

まだ海は見えない。俺は読みかけの推理小説を読んでいるところだ。しかし、あとちょっとで犯人が分かるつてのに、すぐ着きやがった旅館に着くと女将さんへの挨拶。これをしないと人間としてはどうかと思うよな、うん。

女将「おやまあ。今年は男の子もいるんでしたっけ」

千冬「出来損ないの弟とおまけですから」

おまけって……。

それから俺達は宿泊する部屋へ歩く。宿泊する部屋は大事なのだが……。

千冬「一夏と輝羅、お前達は私と相部屋だ」

一夏「千冬姉と?!」

輝羅「淫行防止ってやつですか」

千冬「まあ、そんなもんだ」

因みに、織斑先生はプライベートな時だけ俺と一夏を名前で呼ぶ。そして今俺がいる場所はその相部屋だ。六畳位の和室でトイレ付き、窓を開ければ木々と海が見える。

それと、今日一日は自由行動だ。海に行くことは許可されてはいるが、生憎そこに更衣室は無いため、この旅館で水着に着替えて海へ直行する。

その更衣室へ向かう途中、俺と一夏は顔を真っ赤にする。

「あ、また胸大きくなった?！」

「このお！揉んでやれえ!!！」

とまあ、こんな感じでどこぞの思春期の塊だったら襖に耳立てて聴き入るが、俺と一夏はそんな事をしない。

男子用の更衣室で着替えた俺達は海へ行くのだった。

麻耶「いいですかあ?!夕飯の時間まで自由行動ですからねえ!」

「はあゝい!」

海に着いたら着いたではしゃぐ俺達に、山田先生はそう言った。

のほほん「ねえねえおりむー、ビーチバレーしようよー!びっきーもあー!」

一夏「ああ、いいぜ！」

輝羅「俺も俺も」

その時だ。鈴が一夏の肩に乗り出し、メアナも俺の肩に乗る。

鈴音「いやあ、高い高い！」

メアナ「高いでござる！」

一夏「鈴！お前は猫か！」

輝羅「俺猫好きだけど、いきなり乗っかるな！」

勿論、鈴も俺の肩に乗っかってるメアナも一夏と俺の話を聞かなかった。

軽い咳ばらいが後ろから聞こえたかと思えば、シートとパラソルを装備したセシリアがいた。その目は苛立っているのがよく分かる。そういえば、一夏はセシリアとなんか話してたけど、何かあったのか？

セシリア「鳳さん！一夏さんに何を！」

鈴音「決まってるじゃない！移動監視塔」

セシリア「一夏さん！バスの中で私の約束を忘れましたの！」

約束？あー、あれか。

するとセシリアはいつの間にかシートを敷きパラソルを開いて浜に刺し、シートに伏せ水着の紐を解き一夏を見て言った。

セシリア「さあ、一夏さん。お願いしますわ」

鈴音「あんたこそ！一夏に何させんのよ！」

鈴は一夏から降りるとセシリアに向かって言い放つ。メアナも俺から降りて、俺も言う。

輝羅「……サンオイル買う金があるんだったら、募金が何かに……」

セシリア「？」

輝羅「や、やっぱりにすんな。うん」

一夏はオイルの蓋を開け、手に取りセシリアの背に塗り始める。まだ冷たかったのか、セシリアは軽く悲鳴をあげる。

輝羅「一夏、俺先にビーチバレーやって待ってっから」

一夏「ああ、了解」

その後、セシリアの甲高い悲鳴のち一夏の悲鳴が上がったのは、親友として忘れておこう。後々あいつに変態のレッテルが張られてしまつては鈴はともかく篤が離れてしまう。篤といえ、あいつ何処行つたんだ？

日が傾き始め、あたりを朱く染める。篤は一人水着姿で崖の上でそ

れを眺めていた。そんな彼女の背後を水着姿の千冬が現れる。

千冬「こんな所にいたのか？」

箒「ええ、まあ。実は夕べ…」

千冬「束から専用機を送ると聞いた。真偽を聞きたい」

箒「…… 本当です」

箒は沈む夕日に向かい、その箒の専用機となるISの機体名を呟いた。

箒「…紅椿^{あかしはな}」

続く

第三話 臨海（後書き）

メアナ・ノート

年齢15歳

IS学園に転入してきた飛び級生。日本が大好き故に侍口調。カナダ生まれのカナダ育ち。

輝羅を兄と呼び、箒を姉と呼び親しんでいる。趣味が日本刀集め。

専用機 【ダークネス・ファントム《暗黒の幻影》】

ワンオフアビリティー【ファントムモード】

この能力で一時的に姿を消すという荒業が出来る。

ウェポン

1・ダークネス・サイズ 自分の背丈ほどの巨大な鎌を常時装備。刃の部分の一部がソードビット（別名フアング）として飛び、反対側の残った刃が斧となり攻撃が可能。

2・超振動剣「ソニック・ショート・ブレイド」
別名ソニックブレイドと呼ばれる小型の振動剣。普段は滅多に使用しないが、主に緊急用に使用する。

3・掌部ビーム砲

この機体唯一の射撃武器。零距离で撃つもよし、離れて撃つもよしの万能武器。

第四話 紅椿

夕食の時間。俺達は旅館で出された料理を頼張る。

輝羅「美味しいな、この魚」

一夏「ああ。山葵もいい具合に美味しい」

するとシャルロットが一夏の真似をしてか、山葵の山をいきなり……
…っておい！そのまんまかぶって…。

シャルロット「~~~~っ!!」

まあ、そうなるだろうな。

元々山葵は刺身にチョンと乗せ、醤油を付けて食べるってのが筋つて言うし。山葵に関しては好き嫌いが激しい人はいるだろうな。

一夏「大丈夫か、シャル！」

シャルロット「大丈夫。風味があって美味しいよう…」

まあ、本人が大丈夫って言うし。ま、大丈夫だろうな。

お次はセシリアか。足をモゾモゾしているからには、さぞ正座はきつかるう。

一夏「セシリア、正座がダメなら椅子席行ったらどうだ？」

輝羅「無理いわねー方がいいぜ」

セシリア「一夏さん響さん、心配は御無用ですわ。……………それにここに座るのにどれだけ苦労したことが…」

一夏「ん？」

セシリア「な、何でもありませんわ」

それでもやはりセシリアは足の痺れに負けている。それに比べて、箒とメアナは姿勢が言い方だ。他の女子よりもいい。

一夏「やっぱり無理すんなよ。俺が食べさせてやるから」

セシリア「え、いいんですの？」

そんなセシリアを口火に、やれ羨ましいだのやれ私もやってと騒ぎまくる女子。それが俺にもかかって来る。

「ね、響君お願い！あーんして？！」

輝羅「無茶言つなよ…」

メアナ「お兄ちゃん、それってどういう意味でござるか？」

輝羅「詳しく知らない方がいい。それに俺、フリーじゃねーぞ」

最後の方をボソツと俺は宴会場（こ）に向かう様に響く力強い足跡と気配を感じた。勢いよく襖が開けられ、信長：失敬織斑先生がスーツ姿で現れる。

千冬「旅館で何を騒いでおるか、馬鹿者が！織斑、大方原因はお前

だろう。不用意なアクションは控えておけ」

一夏「は、…はい……」

その後織斑先生が去ると、一夏はセシリアに耳打ちする。そういえば、一夏ってアレ（・・・）が得意だったっけ。

夕食後、セシリアとのほほんを含む四名の部屋のちゃぶ台にボードゲームやトランプ等がおかれていた。

「あゝあ。織斑君と響君が織斑先生と同じ部屋だなんて……」

「そうよねえ……」

その近くでセシリアは浴衣の紐を解き身嗜みを整えていた。

セシリア「（ふふふ。一夏たら…こんな時の為に勝負下着を着けてきて正解でしたわ）」

そんな彼女の後ろで、のほほんが体育座りでセシリアを見ていた。勿論浴衣の中も。

のほほん「うわー！せっしーえっちい下着着けてるうー！」

セシリア「あゝ！」

「なにぃ！？身ぐるみ剥いでやれえー！！」

セシリア「いやああああ！！」

のほん等三人の攻撃から逃げ延びたセシリアはやっと一夏の泊ま
っている部屋までたどり着く。

その部屋の前の襖に、箒、鈴音、シャルロット、ラウラの四人が耳
を立てて部屋の中の様子を聴き入っていた。鈴音に促されセシリア
も行くと、一夏と千冬の声が聴こえて来る。

「最近溜まってるみたいだな」

「あぐ！馬鹿者、力を入れすぎだ」

「あ、ああ。じゃあこのくらい……」

「ん、ちょうどいい」

一体何がどうなっているのか分からない五人は更に更に神経を集中
する。しかし、冷静に考えて見れば聴こえて来るのは一夏と千冬
の声。輝羅の声が一つも聴こえて来ない。

輝羅「なにやってんだお前ら？」

ああ、月が美しい。なんて思ったのもつかの間。部屋に戻ろうとし

たら、箒達が襖に耳を立てている。
部屋には織斑先生と一夏しかいねえし……。どれ、ちょっと脅かすか。

俺は五人の背後にしゃがみ込み言った。

輝羅「なにやってんだお前ら？」

箒「!!」

驚く箒を筆頭に鈴、シャルロット、セシリア、ラウラも驚きトドメとばかりに襖が開き織斑先生が現れる。

千冬「盗み聞きするほどの馬鹿になったか？」

箒「それは……」

一夏「千冬姉、セシリアは俺が呼んだんだ。足痺れてたみたいだったから」

千冬「一夏が呼んだのなら仕方ない。入れ」

俺に続き箒達も入室する。セシリアは一夏の近くに座り、一夏はセシリアの俯せるように促した。

一夏「足痺れてたろ？ちょっと痛いけど我慢してくれよ」

言っと、親指に力を入れセシリアの腰をピンポイントに押す。余程きつかったのだろう、軽く喘いだ。

一夏は昔から指圧は上手かった。下手したら、それで食って行ける位だ。

すると、織斑先生がセシリアの浴衣の裾を上を広げた。一夏は即座に視線をそらし、俺は読みかけの推理小説に目を走らせる。って、織斑先生！何してんですかアンタは！！

千冬「ふむ、黒か。教師の前で淫行を期待するなよ十五歳」

セシリア「ひーん（泣）」

数分経ち、織斑先生は一夏を部屋から出すと、冷蔵庫からオレンジジュースの缶を五つ取り出し箒達に渡し、自分は缶ビールを取り出しプルタブを開け一口飲んだ。俺は部屋にあるお茶だけで十分だ。

千冬「で、一夏の何処に惚れた？あいつはいいぞ。炊事洗濯は当たり前。疲れたら指圧のサービス。至れり尽くせりだな結婚した相手は」

箒&mp;鈴音&mp;セシリア&mp;シャルロット&mp;ラウラ「……くれるんですか！？」「……」

五人はキラキラと目を輝かせ織斑先生に言った。そんな織斑先生はビールをまた一口飲み、言った。

千冬「やらん」

箒&mp;鈴音&mp;セシリア&mp;シャルロット&mp;ラウラ「……えー……………」

そら簡単に自分の身内の人間をやる人間はまずいない。ありきたりなドラマによくある「娘はお前にやらん！！帰れ！！」「みたいなもんだ。

推理小説を読み終え、俺はまた別の小説に手をかける。まさか犯人があいつだったとは。

輝羅「……。でもなんでグロンギが復活を……」

ボソリと俺は呟いて、押し入れを開き、入る。そこを鈴が見掛け、俺に喋りかける。

鈴音「何処で寝るつもり？」

輝羅「押し入れ」

鈴音「なんでよ」

第「部屋の敷地面積を考えろ」

鈴音「ああ」

そう、この部屋の面積は布団二つ分しか敷けない。故に三人目の俺は押し入れに入り、どこぞの猫型ロボットと同じ様に寝る。

輝羅「じゃ、お休み」

布団を被った俺は押し入れの戸を閉め、眠りについたのだった。

次の日の朝。一夏は目の前にある非現実的な地面に生えている何かを見ている。それは機械で出来たウサ耳だ。しかも直角に曲がって

いる。

一夏「箒、おはよう」

箒「ああ、おはよう」

一夏「これに心当たりあるか？」

合流した箒に尋ねる一夏だが、彼女はそれを見た途端急に不機嫌になりその場を去った。

擦れ違いにセシリアが現れる。彼女も機械で出来たウサ耳が気になっっている。機械は地面に埋め込まれていないのが常識。それとなく一夏はウサ耳を引っかく。と同時に上空から人参の形をしたミサイルが落ち、一夏の目の前に突き刺さる。

中から出たのは人参から生まれた人参太郎ではなく、服のテーマが【一人不思議の国のアリス】な……。

束「ヤッホー！ 君！ お久しぶりぶり」

「

篠ノ之束だった。

朝食後、俺を含む専用機持ちは特別メニューを行うと聞いた。

集まったのは、俺を含め一夏、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、メアナ。それと意外な事に箒までもいた。俺達はそれぞれISスーツに身を包んでいる。専用機持ちはそれぞれ別々のメーカーで別々のカラーバリエーションのISスーツを着る。俺のは一夏と同じメーカーで同じタイプの黒と白の二色カラーのスーツだ。

話を戻すが、何故箒がいるのだろうか。あいつはまだ専用機を持っていない。何故？

千冬「よし。専用機持ちは全員揃ったな」

鈴音「先生、箒は専用機持っていないでしょうに」

千冬「それはいずれ分かる事だ」

織斑先生が言うと、彼方から土煙が舞い、徐々にこちらに向かって来る。あゝ、あれが大体誰か予想つくな。

束「ちiiiiiiiiiiiiiiiiichyaあああああああああ
ん！！！！」

織斑先生に飛び掛かろうとした束さんは、ガシッと顔を織斑先生に摘まれ大人しくなる。…ハズもないか。

束「ぐぬぬ〜！相変わらずのアイアンクローだねえ！！」

メアナ「お兄ちゃん、あの女の人怖いでござるう……」

輝羅「あゝはいはい、怖く無いからな、な？っていうか何で束さんがここに？」

そう俺が呟くと、今度は箒がいない。束さんがここにいるのに、そう簡単に遠くへは逃げられまい。どう彼女が足掻こうとも束さんからはある意味逃れられない。

束「箒ちゃん消えちゃったねえ〜！けどけど、箒ちゃんセンサーが

あるもんねー」

ホントにめでたいなこの人は。

某龍の球に出そうな手持ちのレーダーを頼りに一つの岩の影に走る。
そして獲物（箒）を見付けた様だ。箒よ、哀れ。

箒「うあ…！」

束「箒ちゃん！お久しぶりぶり〜」

箒「お、お久しぶりです……」

束「いやあ。大きくなつたねえ」

6年も久しぶりじゃそりや大きくなるな普通は。小学校の四年から、
箒達家族はバラバラだったからな。兄弟姉妹の再会って、何物にも
変えられないっていうし。

束「特にオツパイが…」

ばしいん！

おーい箒い、何処から竹刀取り出したー？

箒「殴りますよ！」

束「ひどーい！殴ってから言つたあー！」

輝羅「そりやセクハラされりゃ誰だってやられますよ」

束「オー！いつくんきーくんおひさ〜！」

千冬「束、そろそろ自己紹介しろ」

束「えええ〜、めんどくさいなあ」

いや、それ人間にかかせない礼儀みたいなもんでしょ束さん。
束さんはくりと一回点し、言った。

束「私が天才の束さんだよ。ハロー終わり」

適当過ぎるでしょうが！

鈴音「束って…」

シャルロット「ISの開発者にして、天才科学者の…」

ラウラ「篠ノ之束…」

メアナ「初めて会ったでござるう」

束「うつふつふ…」

あゝ、こりやヤバいぞ。たいていあの人が目を光らせて含み笑いす
んなんで、何か隠しているしかねーな。

束「さあ、大空をごらんあれ！」

束さんが上を指差すと、何やら降ってくる。モノリス…だろうかそ
んな物体が重力に引かれおちてくる。

やがて、地上に落ちたそれは、IS約一機分の大きさがあった。

束「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと【紅椿】あかつばき！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製だよー！」

その間に、いつの間にかモノリスは開きややプリティな光が弾け、紅い鎧が、ISがそこにあった。

束「何たって紅椿は天才束さんが作った第四世代型ISなんだようー」

輝羅「俺のフリーダムもね。その件に関しては、感謝してます」

束「さあ箒ちゃん！今からフィッティングとパーソナライズを始めようか」

束さんが手元のリモコンを弄ると、紅椿はその装甲を開き、主を待つかの様な雰囲気醸し出していた。

千冬「さっ、篠ノ之」

織斑先生に促された箒は紅椿に歩きだし、その身に紅椿を纏わせる。成る程、以前編入前に束さんからデータを拝見させてもらったが、あれがこの設計図だったとは。

束「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね」

そう言いながら空中に3Dキーボードを数個投影し、束さんは高速でキィを打ちまくる。すげーな、指先で下のキィを打って、指の第

二間接で上のキーボードのキイを打つなんて。

鈴音「すごい。信じられないスピードだわ…」

輝羅「天才の名は伊達じゃないって奴だな」

メアナ「お姉ちゃんがとても綺麗でござる」

確かに、紅椿を纏っている筈はいつもとは違う感じを放っていた。
しかし、俺と同じ第四世代ISだとわな。

束「じゃあ試運転と行こうか」

輝羅「……既に嫌な予感がするのはなんでだ？」

束「じゃあきーくん、箒ちゃんとの模擬戦お願いねー！」

輝羅「やっぱりね」

輝羅「どうだ調子は？」

箒「大丈夫だ」

フリーダムを展開した俺と、同じく紅椿を展開した箒は空中でオーブンチャネルで会話する。成る程、紅椿は二刀流か…。

輝羅「はああ!!」

先手必勝！俺はビームサーベルを両手に逆手に握り、紅椿に、箒に接近する。

箒<甘い！>

すると、彼女の両手に刀がおさまり、鏢ぜり合いの状態になる。オープンチャネルを通し、束の声が聞こえて来る。

束<箒ちゃんの握ってる刀は、右のは雨月、左のが空裂ね>

クスイフィアスを箒に打ち付け、俺は一度距離をとると、箒は右の雨月を振るう。雨月からいくつものビーム刃が俺に飛び掛かる。咄嗟に左のシールドで防ぐ。が、たった一発防げなかった。つく。まずいな。

そんな一瞬の隙が、許されなかった。

箒<はああ！！>

箒は左の刀・空裂を振るい大型のビーム刃が俺に大ダメージを与えた。

元のフリーダムシールドエネルギーが600。平均的なISのシールドエネルギーは550程度。それが一瞬に半分以下に減った。

輝羅「やるじゃねーか」

箒<そつちこそ！>

それから、互角の戦いとなったが、呆気なく俺の負けだった。地上に降りると、山田先生が息を切らしてこちらに走ってきた。

それは、だれもが予想だになかった事だったのだ。

千冬「二時間前。アメリカのフロリダ沖で実験中の有人ISが突如暴走し、装着者とともに日本へ向かっている事が分かった」

アメリカのISが実験中に暴走?!
しかも有人かよ…。

セシリア「はい」

セシリアが突然挙手する。織斑先生がそれに気づき、セシリアに話し掛ける。

千冬「何だ、オルコット」

セシリア「その機体の詳細なデータをお願いします」

千冬「口外すれば数ヶ月の監視と懲罰の処罰が下るが?」

セシリア「構いません」

因みに、ここは旅館の第三宴会場。そこを作戦ブースそして、数台のコンピュータ機器と空間ディスプレイ等がある。これじゃあSF映画のミーティングルームだなこりゃ。

そして映しだされたのは、その暴走しているISだそうだ。名は【シルバリオ・ゴスペル】か。別名銀の福音と織斑先生が付け加えて言う。

輝羅「……スペックの殆どが化け物級って、そんなのあり?!」

シャルロット「しかもスピードも通常の倍近くはあるよ」

千冬「勝算があるとすれば、一撃で大量のダメージを与える攻撃で仕掛けるしかない」

織斑先生が言い終わると同時に、俺と箒と鈴とセシリア、シャルロットとラウラが一斉に一夏を見遣る。

一夏「俺!?!」

シャルロット「当たり前だよ」

鈴音「あんたの零落白夜があるじゃない!!」

輝羅「俺もやりたい所だが、フリーダムのスピードじゃ歯がたたねえ。それにまだフリーダムのワンオフアビリティは発動できてねーし」

そもそも、フリーダムのワンオフアビリティは束さんでさえわからない……らしい。あの人は俺でも実妹の箒でも中身がまるで分かん。

すると、天井の板が一枚落ちて、俺の頭にクリーンヒットする。

輝羅「グヴェー!」

メアナ「お兄ちゃん!?!大丈夫でござるか?」

輝羅「ああ、大丈夫。……多分」

そしてその穴から束さんが現れ織斑先生に詰め寄り、喋る。

束「やーやー！中々対策出来てない見たいだね」

千冬「言わんでいい」

束「いい作戦が私の頭になうぶりんていんぐ！」

千冬「何？」

束「篝ちゃんの紅椿がいつくんの白式を担いで行けばOKだよ」

紅椿に白式を担がせる？

成る程。紅椿は俺のフリーダムよりもスピードが高い。この作戦に最適なペアだな。

セシリア「お待ちください！私のブルーティアーズの高速パッケージが本国より届いております」

千冬「だから何だ。流出変換は済んだのか？今すぐに出せるのか？起動にどれだけ時間がかかる？」

セシリア「すみません……」

セシリア、哀れ。

束「それよりもあれだよー。まるで白騎士事件を思い出すねー」

白騎士事件。

それは当日ISが発表されて間もない頃。世界中のコンピュータがハッキングされ、日本に向け発射された。それを何処からともなく現れた謎のIS・白騎士が次々にミサイルを打ち落としてしまった。これにより、世界は嫌々ISを認めざるを得なかった。そして、それこそが現代兵器が鉄屑同然になった根源でもあった。

束「束さんの推理が正しければ、バスト85」

輝羅「先生、はい」

千冬「うむ」

ばしいん！

俺は織斑先生にハリセン（俺お手製）を渡し、織斑先生は束さん进行いっ切り叩く。

束「ふえーん、束さんの脳みそは真つ二つに割れちゃったよお」

千冬「そうかそれはよかったな。これからは左右別々に物事が考えられるぞ」

束「ならいつかー」

輝羅「いや、よくないでしょうが」

箒「それでは、お願いします」

束「オッケー」

箒「（これが紅椿…）」

箒は左腕に鈴のブレスレット状態に待機してある紅椿を起動し、身につける。

束さんはそれを見計らった様に、紅椿の最終チェックを行う。

輝羅「一夏、頑張れよ」

俺は去り際に一夏に言った。

一夏「ああ」

そして、その場に束さんと箒と一夏を残し、俺達は作戦ブースに戻った。

頼むぜ、一夏、箒。

続く

第四話 紅椿（後書き）

銀の福音の暴走

紅椿のデビュー

そして、白式とフリーダムの覚醒

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【福音】

第五話 福音（前書き）

今更ながら、注意事項。

原作と一部異なりますが、それでも構わないという方はお進み下さい。そうでない方は回れ右で御戻り下さい。

第五話 福音

一夏はISスーツのまま、海岸に立っていた。右腕の腕輪に内蔵している時計を見る。現在午前11時と22分。そろそろ作戦開始時間だ。

後ろから箒が白いワンピーススタイルのISスーツ姿でゆっくりとこちらに歩く。静かに。

二人はコクンと頷くと、ISを起動する。

箒「行くぞ、紅椿！」

一夏「来い！白式！！」

数秒としない内に、紅椿を纏った箒と白式を纏った一夏がそこにいた。

千冬「これより、作戦を開始する」

オープンチャネルを通じ、箒と一夏に喋りかける織斑先生。返答する箒は僅かながらだが、浮いてる気がした。

箒「織斑先生。私は状況に応じて、一夏のサポートをすればよろしいですか？」

千冬「そうだな。だが、無理をするな。お前は紅椿での実践は皆無だ突然何かしらの問題が出ぬとは限らない」

篤く分かりました。出来る範囲で支援します>

鈴音「ねえ、あの娘声が弾んで無い？」

輝羅「だろうな」

メアナ「お姉ちゃん……やっぱり専用機を持てた事に……」

シャルロット「調子に乗っているって事だね」

その頃、織斑先生はプライベートチャネルで一夏に何か忠告をしているのに気が付いた。さしずめ、釘を打っているのだな。

輝羅「……おかしい。おかしすぎるぞ」

メアナ「なにがでござるか、お兄ちゃん」

輝羅「こんな時にISの機動試験をやるのは、問題は無い。おかしいのは、紅椿の登場と今回の福音の暴走だ」

確かに出来過ぎている。

次におかしいのは、束さんが紅椿の調整後行方をくりました。何故だ？まるで理解出来ん。

鈴音「まあ、確かに出来過ぎよね」

そんな時だ。山田先生が、突然口を開く。

麻耶「み、未確認生命体三号が、この旅館に向かってきます!!」

千冬「何っ！」

輝羅「俺、行きます」

そう俺は言つて、襖を開け廊下を走る。

俺が何故出たのか、メアナは未だに分からなかった。

スニーカーを履き、門を出ると、そこには蝙蝠怪人ズ・ゴウマ・グがそこにいた。

最後に見たのは、究極体になった時だ。復活したせいか、元の姿に戻っている。

ズ・ゴウマ・グ「貴様とまたやり合うとはな」

輝羅「お互い様つて……とこだな。変身！」

クウガに変身した俺は先制攻撃として、マイティパンチを繰り出す。それを読んでか、ゴウマは一步下がりそれを避けた。

待てよ、今はまだ日が昇っている。なのに、コウモリ怪人のゴウマは平気で、しかも夜の時と同じ動きをしている。強化体の名残だろうか。でも、俺は負けられねーな。

ズ・ゴウマ・グ「どうしたクウガ。一年振りの対決がこうとは、名残惜しいものだ」

クウガM「うっせ！余裕ぶつくくのもいい加減にしろよ？今、俺の親友が、必死になって戦っているんだ！だからこそ、俺も戦う。皆の笑顔の為に……」

俺はゴウマにジャブ、アッパーカット、裏拳と繰り出し、怯んだ所

で俺は数本下がり構え、助走をつけてからのマイティキックをゴウマのベルトのバックルに直撃させる。

クウガM「うおおりやあああ!!」

ズ・ゴウマ・グ「ぐおっ!!」

キックを受けたゴウマは後方に飛ばされ、立ち上がろうとするが、バックルが完全破壊され、俺の目の前でゴウマは断末魔の叫びをあげ爆発した。

ズ・ゴウマ・グ「地獄で、……待っているぞ……クウガああ!!」

ドガアアーン!!

あの時は、アイツ（……）がゴウマを手につけた。でも今は違う。ゴウマは同じ過ちを繰り返すことなく、死んだ。変身を解いた俺は、ゴウマに合掌し、その場を去った。

輝羅「何だって!?!一夏が………箒を庇って?!」

シャルロット「うん。幸い命に別状は無かったけど、………まだ目は覚ましていないんだ」

輝羅「それで?箒は?!」

ラウラ「看病………といえば聞こえが良いが………」

箒は、未だ目を覚まさない一夏を見て泣いていた。髪を結ぶためのリボンは福音との戦闘で燃えてしまった。

もし自分が強ければ…

もしあの時、密漁船がいなければ

しかし、今はそれは終わった事。悔やんでも仕方ない。

そして、悔やみきれず嗚咽を漏らすと、だれかが後ろで箒を叱った。

輝羅「何やってんだ！悔やむ事で一夏は目を覚ますのかよ！」

俺は、引き止めようとするセシリアに鈴、シャルロットにラウラ、そしてメアナを払い、一夏と箒のいる和室に入った。そして言っちゃった。

輝羅「何やってんだ！悔やむ事で一夏は目を覚ますのかよ！」

振り返る箒の背後に、布団に横たわる一夏がいた。

箒が紅椿を手に入れた事により、調子に乗った。しかもその時間帯は確か、職員打鉄舞台が空域と海域を封鎖していたにも関わらず、密漁船が出ており、それに気を取られた二人は福音の攻撃を受けた。その際一夏は箒を庇いダメージを負った。シャルロットから聞いたとき、俺は怒り心頭に発した。密漁船もそうだが、お人よし過ぎる一夏も、調子に乗りすぎた箒も、そして今何もしない自分も怒った。俺は、俺は何のためにクウガに変身したんだ。

篤「私はもう、ISには乗らない。乗りたくない！」

ばちいん！

俺が動くのより速く、鈴が篤に平手打ちをかます。

鈴音「ISに乗らない？馬鹿言わないでよ！！私達代表候補つてのは、そんなに簡単に、軽々しくなれないのよ！！」

輝羅「お前がそんな弱虫だったとはな。正直失望したぜ。けどよ一夏の分まで俺は福音と戦う。死に物狂いでもな」

だが、ここで一つ問題だ。今のところ、福音の居場所が分かっていない。俺はさつきゴウマとの戦闘を終えた。だから作戦ブースには顔をだしていない。

ラウラ「福音の居場所を特定した。我が国の衛星からの映像だ」

空中ディスプレイに映し出されたのは紛れもなく福音。胎児の様に膝を抱え、バリアを展開している。

輝羅「さすが黒ウサギ隊！ドイツの衛星も伊達じゃねーな」

シャルロット「篤、君はどうなの？僕は行くよ」

ラウラ「私も行こう。私の一夏の気を失わせた償いをしなければ」

セシリア「私も負けられませんか」

メアナ「僭越ながら私も行くでござる」

鈴音「私も行くわ。で、どうするの、箒？」

箒「私は……私は……行くぞ！」

輝羅「よっしゃ！これで行くぜ。これより、俺が指揮を執る。作戦コード、福音の歎き！以降俺を、K…と呼べ」

輝羅「行くぜ、福音！」

ラウラのファーストアタックが福音に当たると、福音はこっちに気付いた。

輝羅「セシリア、援護頼むぜ！」

セシリア「了解ですわK！」

強化パッケージ【ストライクガンナー】を装備したセシリアがアタックする俺の援護を開始する。

福音は頭部にある翼の弾丸を掃射する。後ろがから空きだ！

輝羅「メアナ！」

メアナ「分かったわ、お兄ちゃん」

メアナのISのワンオフアビリティー【ファントムモード】が解け、

福音の背後でダークネス・サイスを振るう。が、まるで読まれたかのように、それは避けられた。

輝羅「行くぞ、箒！」

箒「うむ！」

俺のバラエーナの後に、箒の空裂のビーム刃が福音に向かう。

輝羅「そんな……馬鹿な！」

俺は目の前の真実が、夢であって欲しいとまで思った。福音は、俺達の攻撃を受け片翼を失ったものの第二移行セカンド・フェイズまで行いやがった。

ラウラ「K！指示を！」

輝羅「……つく！作戦続行！！皆全力で応戦せよ！！！」

箒「いいぞ！」

セシリア「了解ですわ」

鈴音「分かったわ！」

シャルロット「うん」

ラウラ「了解した！」

メアナ「うん」

そういえば、メアナの奴ISに乗ると口調変わるんだな。
そんな事はどうでもいい！今は福音を墮す！！そして中の人も助ける。

輝羅「ビームランスを喰らえ！」

俺は二本のビームサーベルを繋げ、福音に攻める。その後からブル
ー・ティアーズ（ビット）が飛び、福音を狙い撃つ。
しかし、それもアウト。当たらない。追撃のシャルロットとラウラ
もコンビネーションアタックをくりだすも、アウト。

シャルロット「行くよ！」

ラビット・スイッチ
高速切替で弾が切れたマシンガンを変え、銃撃するが福音の光弾が
当たり、シャルロットはラファール・リヴァイブ・カスタムと共に
海中に沈む。

鈴音「こんのー！」

輝羅「よせー！」

福音が攻める鈴も海面にたたき付ける。

箒「鈴！」

頭に血が上ったのか、箒も福音に攻める。

輝羅達が福音との戦闘を開始したその時、一夏は夢を見ていた。辺り一面海で、流木の他に少女がいた。白い帽子に白いワンピースを着ていた。心地好い歌も歌っていた。一夏は近くの流木に腰を下ろし、その少女を見ていた。

「行かなくちゃ」

歌うのを止めた少女に一夏は問う。

一夏「行くって、何処に？」

すると、少女は消え、日が暮れた様に辺りは赤くなる。

「力を、欲しますか？」

一夏「え…」

振り向くと、そこには中世の騎士のような甲冑を身に纏い、顔はバイザーで半分隠されて口しか見えなかった。声を聞く限り、女であることは間違いない。

「あなたは、力を欲しますか？」

その女性の問いに、一夏は後頭部に手をやり思った事を口に出した。

一夏「……俺は、大切な仲間を…友達を助けたい。だから、俺は力が欲しい!」

そう決意する一夏の後ろで白いワンピースの少女が再び現れ、優しく一夏に言った。

「だったら、行かなきゃ」

状況は最大に不利と化した。俺達はほぼ全員シールドエネルギーが危険域に達していた。こんな状態じゃあ、ハイマツトフルバーストなんて、撃てるわけねーな。

輝羅「行くぞー!!」

メアナ「!?お兄ちゃん!!」

福音が俺に掃射を仕掛け、俺は突進し過ぎたせいか避けられない。そんな俺をメアナは庇い、ダメージを負い落ちていく。

輝羅「メアナあああああ!!!!」

第「おい、気を抜くな!やられるぞ!」

輝羅「ああ、だけどこれ、どんなムリゲーだよ!チートじゃねーか!」

ビームライフルを構え直す俺だが、どうも福音の攻略が掴めない。シールドはボロボロで防ぐのも一回が限界だ。けど、福音に囚われてる人を助きたい!

輝羅「セシリア、ストライクガンナーまだイケるか！」

セシリア「申し訳ありませんわ、福音に……」

輝羅「ラウラ、AICで福音を防ぐ事は出来るか！」

ラウラ「無理だK、早過ぎて出来ない！」

く、万事休すって奴か？

考えてるだけでも、やってられない。

しかし、俺が迷ったせいかなラウラとセシリアが海面に激突した、簞も吹っ飛ばされた。

輝羅「……………ぜってー救ってやつからよ、覚悟しな！」

ビームサーベルを一本に繋げ、構えた。

簞は夢を見ていた。周囲は真っ暗で何も見えない

結局、自分じゃ勝つことも出来ない。

そんな感情しか、出てこなかった。

そんな時だ。不意に懐かしく頼もしい感じが突然沸き上がってきた。そして目の前が急に光りだし、自分の名前が聞こえた。

一夏「大丈夫か！箒！！」

箒が目覚ますと、そこには白式を装備した一夏が箒の目の前に座って真っ直ぐにこちらを見ていた。

箒「い……ち、か……お前……」

一夏「大丈夫だ。あ、それとこれ」

一夏が差し出したのは、真新しいリボンだ。それも、以前箒が髪を結んでいた物と同じで色違い。

一夏「誕生日、おめでとう」

7月7日。その日は箒の誕生日だ。もっとも、日が明けてしまったので一日遅れてしまった。

一夏「福音は俺に任せろ！」

その一夏の、白式の左腕には新武装・雪羅があつた。第二移行が完了した証拠だ。早速雪羅をクロー形態に変え、福音の下へ行く。箒は手渡されたりボンで髪を結び、一夏の後を追った。

一夏「輝羅！」

輝羅「一夏、お前……第二移行が済んだのか？っていうか、大丈夫

か？」

一夏「ああ、大丈夫だ。それとこれ、データには雪羅って出てた」

一夏はそう言つて、その左手を見せた。俺が束さんここにいたとき、そんなデータ見たことねーぞ。

その俺の油断が生じ、福音が一斉掃射をする。が、前に出た一夏の雪羅・シールドモードで塞がれた。その後、雪羅の手の平から荷電粒子ビームも出た。

すげえ、すげえぜ一夏。俺も負けられねえ、福音の操縦者もメアナも鈴も皆皆救つてやる！！

その俺の心がトリガーとなつたのか、フリーダムのワンオフアビリティーが発動した。

輝羅「ワンオフアビリティー……【SEED】」

読み取ると同時に、各部ボロボロだったのが見事に修復しシールドエネルギーも全快。チートじゃねーか、フリーダムのワンオフアビリティーって…。

輝羅「行くぜ！」

すると、ワンオフアビリティーが発動しているのか、ビームライフの発射速度、起動力、何もかもがクリアになった。

輝羅「一夏、俺も行くぜ！！」

一夏「ああ、後ろを頼むぜ！！」

輝羅「へっ、当たるなよ！！」

紅椿を纏っている箒は、自分に何か出来るか考えていた。一夏は第二移行を行っており、輝羅はワンオフアビリティーを発動している。

箒「（私は……一夏の力になりたい。今度こそ……絶対！！）」

その箒の心に反応したのか、紅椿が輝き出した。
ワンオフアビリティー…【絢爛舞踏】の発動だ。

一夏「（くそ…シールドエネルギーが）」

雪羅を使いすぎて、シールドエネルギーを大量に消費してしまった。福音は輝羅が相手しているので、今の所一夏に害は無かった。そこに、ワンオフアビリティーを発動している箒が一夏の隣に現れた。

一夏「箒！」

箒「一夏、受け取れ！」

差し出す箒の手を一夏は握り返す。するとどういう訳か、シールドエネルギーが元の数値にまで回復した。

これが、紅椿のワンオフアビリティー…【絢爛舞踏】の能力。シールドエネルギーを増幅させ、尚且つ他のISに送る事が出来る。

一夏「サンキュ、箒！」

箒「ああ。行ってこい！一夏！！」

一夏「オッケー！」

輝羅「（ちいつ、SEEDの限界時間が……）」

セシリアに鈴、ラウラにシャルロットもメアナも戦線復帰したが、ビットも龍砲も決まらない。

シャルロットがアサルトライフル掃射するが、福音はそれを避ける。

ラウラ「甘い」

シュバルツェア・レーゲンのプラズマ砲が福音を捉え発射されるが、これも避けられた。

そんな時だ、一夏が俺達に合流した。

一夏「待たせたな！」

輝羅「一夏、俺が合図を出す。零落白夜で福音の動きを止めろ！！」

一夏「解った！」

一夏は雪片式型を構え、展開しビーム刃を出す。

輝羅「今だ！」

俺の合図を出すと同時に、白式が金色に輝き、福音に向け零落白夜を繰り出す。一瞬怯む福音。俺は、福音に向けハイマツトフルバーストを繰り出す。

一夏「零落白夜！」

ザシュッ！

輝羅「神に祈ったか？次に笑顔になった時がお前の幸せてな！！」

俺がキメ台詞を吐いたその瞬間、全砲門が開き五つのビームが福音に向け発射された。

福音は装甲という装甲と頭部の翼が破壊された。

俺は操縦者を落ちる寸前で救出し、周囲を見回す。海面すれすれに浮かんでいる鈴とシャルロット、視界の端で滞空しているラウラとセシリア、一夏と箒、そしてメアナ。皆頑張ってくれたな。

輝羅「福音の歎き、作戦完了！！」

そう高らかに宣言する俺だった。

旅館の大宴会場。俺は勿論一夏達やメアナも正座で座らされている。当然だ、待機命令が出ているというのに無断で出撃し、福音を撃墜したからだ。因みに、俺が助けた福音の操縦者は今学園のスタッフが治療中らしい。

千冬「作戦完了……と言いたい所だが、貴様等は重大な違反を犯した。学園に帰ったら貴様等全員には反省文と特別課題を出すからそのつもりでいろ」

輝羅「すみませんでした」

摩耶「お、織斑先生、その位にして頂けませんか？」

スポーツドリンクを人数分抱えて持つて来た山田先生が織斑先生にそう言った。確かに、2時間近く正座するのは慣れたものでは無い。実を言うと、俺は30分前から足の感覚が無くなってしまっただけで痺れていた。

千冬「…仕方ない。メディカルチェックを行う。それと、よくやってくれた、今日はゆっくり休め。それと響」

輝羅「は、はい！」

千冬「お前が助けた福音の操縦者だが、たった今意識を取り戻した様だ」

輝羅「そうですか……良かったー」

俺は安堵の溜息をつき、痺れる足に鞭を打って体質する。

輝羅「一夏、いつまでいるつもりだ？」

その後、一夏に冷たい十二の視線が放たれたのは言うまでもない。

「ねえねえ！どうして出撃したの？」

セシリア「申し訳ありませんわ、言えない事になっておりますの」

その晩の夕食時、セシリアと鈴、ラウラとシャルロットが座っている席に、ワイワイと数名の女子が寄っている。俺はというと、一人でぽつんと旅館の夕食を頬張っていた。

輝羅「あれー？一夏と箒の奴どこ行きやがった？ま、いつか」

何故か二人がいなかった事に俺は気が付いた。

一夏は規則を破り、海を泳いでいた。そして泳ぎ疲れたのか、陸に上がり腰を下ろす。

一夏が見上げる今宵の月の光は心の中にまで届く様に神秘的だ。そんな彼の後ろで足音が聞こえてきた。振り返るとそこに白い水着姿の箒がいた。しかも際どい。

箒「こ、こんな所にいたのだな……」

一夏「あ、ああ……」

箒は自分の水着姿に羞恥し、一夏はそんな水着姿の箒に戸惑い背を向ける様に岩場に座っていた。

しばらく沈黙が走るが、箒がその沈黙を破り一夏が振り向く。

箒「その…誕生日のプレゼント何だが……な」

一夏「何だ？」

箒「お、お前はシチュエーションというのを知らぬのか！」

一夏「あー、いや、戦闘中だったし……それに、そのリボン、似合ってるぞ」

箒「……そんなに似合ってるのか……？」

一夏「ああ」

箒「そうか、似合ってるのだな。うん」

笑顔で返す一夏を見た箒は途端に心臓が激しく鼓動してし、頬を赤らめた。

やがて、お互い向き合い一夏は箒の肩に手を乗せ一つになるはずだった。

一夏「ん？……いゝ！」

突如一夏の額に何かがぶつかった。それは紛れもなく発射準備のブル・ティアーズビットの銃口だった。

ラウラ「姿が見えないと思えば……」

シャルロット「一夏あ、何をしているのかな？」

鈴音「よし。殺そう！」

セシリア「ふふ、ふふふふふ……」

シュバルツェア・レーゲン、ラファール・リバイブ・カスタム、甲龍、そしてブルー・ティアーズを装着していた、ラウラ、シャルロット、鈴音、そして何故か絶賛ヤンデレモード中のセシリア達四人だった。

一夏「ひいゝ！ 箒、逃げるぞー！！」

箒「あ、おい！」

四人から逃げる様に一夏は箒を抱き抱えてその場を去った。その逃げ足は青のクウガ顔負けというほど。

そして、その後千冬から雷が落ちたのは言うまでもない。

夕べ恐ろしい惨状をちらつと見てしまった俺は、結局一睡も出来なかった。

まあ、眠れないから反省文の内容を考えるのに充分過ぎたと言えは過言でも無い。

輝羅「ふあゝあ」

しかし、臨海学校楽しかったなあ。海、やっぱいいよなあ。あと

数日で夏休みだなあ。

そんな事を考えていたら、バスの入り口から見知らぬ誰かが搭乗してきた。一つ二つ位年上のその女性は、ツカツカと俺の近くまで歩み寄って来た。

「ねえ、響くんて誰？」

輝羅「はい、俺ですけど」

その女の人は、俺の顔をまじまじと見詰め、言った。

ナターシャ「私、ナターシャ・ファイルス。福音の操縦者よ」

福音の操縦者！？歩いてても大丈夫なのだろうかと俺は心底心配する。だが彼女は平気だと言わんばかりに胸を張っていた。

輝羅「あの、もう出歩いてても大丈夫なんですか？」

ナターシャ「いいの。助けてくれてありがとね」

輝羅「いえ、とんでもない。俺は、誰ひとりとして、誰かの流す涙は見たく無いんです。皆には、笑顔でいてほしいんです」

だから俺はクウガとしての覚悟と、響輝羅としての覚悟を持った。

ナターシャ「有難うね、これは御礼よ」

ナターシャさんはそういうと、俺の頬に唇を当てた。って、何で！？
ナターシャさんが顔を離すと、そそくさとバスを降りていく。
しばらく俺は、放心状態だったと、のほほんこと布仏本音が言っつ

続く

ていた。

第五話 福音（後書き）

次回

やって来た夏休み

輝羅の固有結界が発動される。

そして幼馴染みとの再会

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【再会】

第六話 再会（前書き）

今回から夏休み編です

作者オリジナルですが、ひぐらしネタ出ます。

クロスが苦手な方は回れ右でお願いします

第六話 再会

今日から夏休みを迎えた、俺達IS学園の生徒たちは、ある意味悠々自適な生活を送っていた。
そういう俺はと言つと……。

クウガM「でりやあああああああ!!」

ズ・メビオ・ダ「ぬあつ!!」

未確認生命体五号こと、雌豹怪人であるズ・メビオ・ダに俺は必殺技であるマイティキックを放った。

左肩に封印のマークを生成されたズ・メビオ・ダは、断末魔の叫び声をあげ、爆発した。

何故俺が、こうしてメビオを倒したかというと、夏休みを利用して実家に帰宅し、掃除をしたくて掃除用具を買いに行く途中にメビオを発見。そして今に至るのだ。

雑貨屋で新しい掃除用具を購入し、帰宅する俺の視界の端に見覚えのある碧色の髪をした少女がいた。

それは、俺が今の今まで会いたいと思っていた少女だった。

少女は自分の運命を呪った。もともと運は人並みだと思っていたが、こうなるとは夢にも思わなかった。

何故なら、彼女の前で汚い男三人が少女を袋のネズミにしていた。

鎌谷「のお、お嬢ちゃん。何ヒトサマにぶつかつたいて謝りも無し

に去ろうとすんじゃない！？謝らんかいわれえ！！」

言葉と生れつきの恐持てフェイスで脅しているのは、長身の鎌谷。その背後にデブの豚山とチビの小山が「そうだそうだ！謝らないのがいけないんだ！！」と、少女に追い撃ちをかけるように言った。

鎌谷・豚山・小山の三人は、愛越学園を自主退学し自分勝手に恐喝やら婦女暴行未遂やらやかしているので有名だ。それでも警察に捕まらないのは、親が何処かのお偉いさんなので、下手に手出し出来ないのだ。

そんな三人に、少女は反論する。

「何よ！ちよつとぶつかっただけじゃない！！」

鎌谷「だから、謝れゆーとんのや。今ここで土下座するか、それとも……ダアレもない場所で全裸にしちゃうけどお？」

豚山「うほっ！親分最高っす！！」

小山「げへへへ」

三人の言ってる事が目茶苦茶過ぎて、少女はある意味引いていた。そして恐怖していた。

そんな時だ。一人の少年が買物袋を下げ、鎌谷達に怒鳴った。

「このっ、ボケナス共があああ！お前等は解ってない！解ってない！！」

鎌谷達はその少年に視線を移しながらも、少女を逃がさない様に少女を囲んでいた。

鎌谷「なあっていい！文句あんのかわれえ！」

「そもそも全裸に萌えない！服は脱がしても靴下は脱がすな！！
例えお天道様が西から昇ることがあろうとも、絶対絶対、これは萌え業界の鉄則だああああああ！！」

その少年の叫び声に鎌谷達は怯え、更に少年は続ける。

「いいか？良く聞けモンキー共！！ホモサピエンスと動物の違いは何か？そう！衣服の着用だ！！」

豚山「ホ、ホモ？」

どうやら豚山におつむは無いらしい。

「つまり人は衣服があって初めて人なのだ！！」

正にその通りである。少女がそう納得し、熱弁する少年を見る。

「それを全部脱がす事でしか欲情出来ないお前等は人以下！動物と同じだ！！」

小山「な、なんだとお！」

「貴様等全員を矯正する！！歯を食いしばれ！！！！」

すると、少年は鎌谷と豚山と小山に次々と殴って、またも熱弁する。

「先程ＡＶの脱衣シーンを引き合いに出したな？」

鎌谷「ああ？」

「例えばここにコスプレHビデオがあつたとする。コスプレと一口に言っても、その裾野は広すぎる。それについて貴様等に講義する事は、B - 29から落下傘で降りてきたヤンキー共に大和魂を一から説明するより困難この上極まりない！！だからここでは最も普及してると思われる制服系で説明する事にする！」

三人はポカンと口を開け、更に更に少年の話を聴き入った。それでも尚少女を逃がさまいと、退路を塞いでいた。

「制服系の御三家といえは何か？答えてみる！！！そうさなあ…制服・体操服・スクール水着だろう。尚セーラーかブレザーかの好みの違いは制服にカテゴリーズするものとする。勿論ブルマかスパッツの違いも同様！スク水も紺か白かの違いはあれどカテゴリーは同じ扱いだ！！！」

ずざっ！つと、三人は後退りたじろぐ。

「どうだ！？これだけでも甘美な響きがするであろう！ではお前等三人がこちらの内の一つずつが好みであつたと仮定しよう！」

鎌谷「ぬああぬいい！？」

「おい！ノツポ！お前は制服だ！」

鎌谷「ああん？」

「デブ！お前は体操服！」

豚山「ぶ、ぶう?!?!」

「そしてチビはスク水だ!!」

小山「チビ言うな!!」

三人の反応などお構い無しに続ける少年を、少女は微笑ましく見ていた。

「頭に思い描け!時間は三秒!!描けたか!?妄想くらい自在にできろ!!気合いが足りん!!やり直せ!!ではお前等の望む衣装が登場するHビデオがここにあるぞ、あると思え!あると信じる!!気合いを入れる!!!返事は 押忍 か S i r Y e s S i r だ!!馬鹿者それでも軍人か!!!」

そういうと少年はまたも鎌谷、豚山、小山に殴り付ける。しかも、裏拳。

ダメージがデカイのか、三人は怖じけづき、嫌々ながら描いた様だ。

「ようし描けたようだな次に進むぞ。それらの萌え衣装が貴様等の馬鹿げた欲情に従い、一糸纏わぬ姿にひんむかれたと思うがいい!」

そう言われ、想像する三人は鼻の下を伸ばしている。

しかし少年は間違いを正すような形相で三人にまたも怒鳴る。

「だがおいお前等よく考えろ!!全部脱いだらもうそれはコスプレHじゃないぞ!?最近そういう詐欺紛いなAVが増えているが実に嘆かわしい!!」

鎌谷「確かにい!?!」

「服を脱いだらもうそれは文明人ではない！動物だー！！全裸でしか欲情出来ない貴様等は、犬・猿・キジだ、きびだんごでも貰って鬼ヶ島にでも失せるGet Back Here！！因みに最近の東西雪解けに従い、ロシア系AVが大量に上陸しているな？そんなことも知らんのか？愚か者おお！！制服系とロシア系を組み合わせたロシア美少女女子高生などというゲター2が抜けて三神合体出来ないような水と油の組み合わせが出ているようだが、本官は断じて認めたりしないぞお！！制服は日本の文化だ！！芸術だああ！！毛唐に日本の和の心など分かりはしない！！！」

豚山「おっほほー！」

鎌谷達は少年の熱弁に教えを説かれ、途中から上の空だった。

「貴様等聞いているのか？軟弱スルメ共がああああ！！歯を食いしばれ！今日は徹底的にしごく！！貴様等が自分の妄想でご飯三杯イけるまで今日は眠れないと思え！！！！はいいいいいい！！！！！！指導指導指導おおおお！！！！！」

鎌谷「俺達が間違っていました！！！」

豚山「ぶ、ぶうー！！！」

小山「出直して来ます！！！」

そういいながら三人は土下座し、その場から逃げる様に逃げ去った。教えを説かれた様な雰囲気だったが、何故土下座して、そして走り去ったのか、それは鎌谷達にしか知らない。

輝羅「俺の固有結界も、ますます磨きがかかった様だな。今に第達の固有結界【一夏LOVE】に太刀打ち出来るくらいに磨きをかけてやるぜ!!」

そう俺が言い終えると、俺が今まで一番会いたかった人物がいた。

輝羅「よっ、魅緒」

魅緒「輝羅、久しぶりね」

俺は買い物袋を下げ、魅緒と共に帰宅した。道中昔懐かしい会話をしていた。それもあつという間で自宅に到着。

久々に帰ってきた我が家は、埃が溜まっていた。いやあ、何日振りだろうな、我が家は。

魅緒「随分掃除サボってたようね」

輝羅「仕方ないだろ、寮生活だったんだからよー」

魅緒「寮？何処の学校？」

そういえば、今の今まで魅緒に話して無かったしな。教えとくか。

輝羅「実は、ひょんなことから束さんに会っちゃってー……IS適合しちゃってー……後は御想像の通り」

魅緒「え！？じゃあ今、女子高に男子二人って？そういう事!？」

輝羅「まあ、そうなるな」

俺はそういつつ、買い物袋から真新しいハンドモップで埃を取りはじめ。魅緒も何も言わなくなり、掃除を手伝ってくれた。ふと、俺のケータイに通話がかかった。一夏からだ。

輝羅「おっす一夏!どうした?」

一夏<どうした?やけに声が弾んでるぞ>

輝羅「まあいいってことよ。それよりどうした?」

一夏<今お前実家に帰ってるだろ?>

輝羅「ああ、今掃除してる所」

一夏<俺も暇だし、手伝うか?>

輝羅「ああ、頼む」

そう言つて、俺は通話を終えて作業に戻る。

しばらくして、やって来たのは一夏を始め、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、そしてメアナというメンツだった。

箒と鈴は魅緒を見るなり、再会の喜びに浸っていた。その後ろで、俺は一夏の肩に手を置き小声で話す。

輝羅「箒とメアナまでいい。なのに、なんでその他大勢までいるんだ来るんだ?」

一夏「スマン。箒と鈴を誘ったのは俺の独断だが、後は想像に任せ
る」

輝羅「まったく、しゃーねーなー。掃除手伝ってくれるなら、二階は
やるなよ？絶対にやるなよ！？」

魅緒「そういえば、私輝羅の部屋見たこと無いなー」

箒「同じく」

鈴音「以下同文」

当たり前だ！俺の秘密の花園なぞ見せてたまるか！
俺は階段を登りながら、一夏達に役割を言った。

輝羅「一夏と箒、取り合えずリビングの掃除を頼む。セシリアは悪
いけど玄関の掃除お願いな。鈴、風呂場頼む。シャルロットはキッ
チンの掃除頼む。ラウラとメアナはゴミ出し頼む。俺は自室とトイ
レ掃除やってから」

俺の指示を聞いて、思わずガッツポーズしている箒と作業に取り掛
かる一夏とメアナを覗いた四名が俺に詰め寄る。

セシリア「響さんよろしいですか？」

鈴音「ちょっと。これってどういう事よ」

シャルロット「それは無いんじゃないかな？僕達だって一夏と一緒
にいたいんだけど」

ラウラ「…何故私がゴミ出し等と…」

輝羅「ほう。お前らは自分がサボってる所を一夏に見られ残念がられたいと言うのか？残念だったなあ、昔の一夏の写真が幾つかここにあるんだが、サボるんだったらあげられねーな。それに一生懸命やってる所を見せて猛アピールっていう手もあるんじゃないのか？」

それを聞いた四人は先程とは打って変わって俺の指示通りに掃除を行いはじめた。

さてと、俺もとつと始めますかな。

右腕にある俺の待機状態のフリーダムの内蔵型時計の時刻は正午を刺していた。昼メシになったその瞬間に、奇跡的に俺ん家の掃除は終わった。

四人には報酬として、小学生の時の一夏の写真を見せた。運動会に学芸会。中学生の写真も幾つかあり、それも見せて渡した。

輝羅「お疲れさん。今飯作っから、それまでテレビ見るなりゲームするなり昼寝するなり何なりしてくれ」

さて、魅緒とメアナは未だしも、その他が危険だ。ストッパー約としてメアナがいるから多分大丈夫だと思う。

一品目を作る最中、台所に魅緒が来た。髪を束ねている所から手伝いに来たのだろう。

魅緒「私、手伝うよ」

輝羅「サンキュ、助かるぜ。じゃあ、茄子炒り作るから茄子剥くの手伝ってくれ」

魅緒「うん」

調理中の輝羅と魅緒を、一夏達は覗いていた。

輝羅と魅緒の仲を知るのは、一夏と箒と鈴だけだ。そしてその仲を羨ましがるのは、言わずもがな。

影で一夏達は小声で会話していた。

一夏「さすが幼稚園時代からの幼馴染み。眩しい、眩しすぎる」

箒「というより、魅緒はいつの間に輝羅とああいう関係に？」

鈴音「そういえば、私が転校する以前から付き合ってたわね」

セシリア「俗に言うリア充というものですね」

シャルロット「（羨ましいなあ。僕も一夏とあんな風に、一緒に料理したいなあ）」

ラウラ「しかし、輝羅も抜け目が無いというか」

メアナ「……所でいつまで覗くつもりでござるか？」

輝羅「出来たぞ！俺と魅緒の自信作！」

そうテーブルに出したのは、茄子を主役に使いピーマンを加え程よい味付けに仕上げた茄子炒りだ。
他におかずを作りたかったが……生憎食材を買ってき忘れたのだ。
しばらくして、茄子炒りを完食し後は悠々自適に過ごすことに。

輝羅「さてと、俺を含めここには何人居る？ 箒、答える！」

箒「何故私が…！」

輝羅「あ、これどうぞ」

そう俺が箒に差し出したのは、中学生時代の一夏の写真だ。
受けとった箒は素直に俺の指示に従った。

箒「私と、一夏。鈴にセシリア、シャルにラウラにメアナ、そして
輝羅と魅緒だ」

輝羅「そうだ。九人もいるんだ！これについてやることはただ一つ
！」

俺の発言に一夏達がゴクリと生唾を飲み下し、魅緒だけは分かった
ような表情だった。

俺はコーヒーセットを取り出し、皆に告げる。

輝羅「三人一組で、コーヒーを煎れる。審査するのは残りの二組だ
！そして、勝者はビリの組に一つの罰ゲームを下す！」

どこぞの天の道を往く男の様に天を指差し、俺は高らかに宣言する。既に豆は用意している。モ力は勿論キリマンジャロ、ブルーマウンテン等その他諸々。

輝羅「罰ゲームと言っても痛い思いや恥ずかしい思いもしなくていい。っていうかむしろするな。ただ、パシリまでならセーフだ。後は誰か質問あるか？」

鈴音「一人の人を独り占めってあり？」

輝羅「これはあくまでもチーム戦だ！抜け駆けは禁止！破ったらそれは、…」

鈴音「それは……？」

輝羅「……冷ややかな目で見られるであろう。それも自分が一番気にしている人物からだ」

注意事項も言ったことで、早速あみだくじだ。

紙にあみだくじを書き上部に名前と下部にAからCをアトランダムに記入し、順々にあみだくじをなぞっていき、チームが決まった。

Aチーム、俺 魅緒 メアナ

Bチーム、一夏 箒 ラウラ

Cチーム、シャルロット、鈴、セシリア

以上のチームで決まる。

即座に三チームはスクラムを組み、どの豆をどれくらい配合するか決めていた。

輝羅「いいか、ここはハワイモ力を五粒程度にブルーマウンテンをふたさじで行くぞ」

魅緒「オッケー！」

メアナ「了解でござる」

ややあつて、先にCチームがコーヒーを煎れた。色も香りもちょうどいい。だがちと濃い。

セシリア「一夏さん。後おまけに響さん。美味しいですか？」

一夏「ああ。美味しい」

輝羅「だがちと濃い」

続いて俺が率いるAチーム。先程俺が提案したように配合する。湯気がいくらいに立ち、優しい香りを放っていた。

輝羅「因みにここで豆知識！コーヒーはアイスで飲んだ方がいい。元々コーヒーは熱帯で育てられ、アイスコーヒーとして出されていた。そして本質を知るなら、俺はブラック無糖を薦めるぜ」

因みに、俺達Aチームのコーヒーは中の上位だった。

一夏「次は俺達のコーヒーだ。ラウラがいいアドバイスくれたから、美味しいことは間違いない」

さて、そのお点前はいかに。

輝羅「ん？」

ラウラ「どうした？」

輝羅「いい濃さだ。申し分ない。しかも豆を粗く挽いたな？」

ラウラ「その通りだ」

輝羅「色もいい。やはり美味しい」

高得点だな。

そして審査結果は、一位Bチーム、ビリCチームだった。

罰ゲームのパシリ、それを受けた三人は筆舌しがたい状況になっていた。

コーヒー対決の次は、テレビゲームで対戦することとなった。

因みに一夏の家にはテレビゲームの類が無いらしい。

対戦するゲームは昔ながらの格闘ゲームで最大四人対戦まで可能なゲームだ。

しかし、そのゲームはひと昔前のゲームだ。巷ではISを使う格闘ゲームがあるが、あれは同じ作品でも各国で販売されている作品ごとにキャラのスペックが違ったりする。

そんなひと昔前のゲームとは、スマ ラだ。しかもハードはゲームユープ。コントローラーは三つもあれば充分だ。

輝羅「ルールは至って簡単。ストック6で一人二回落ちたら次のプレイヤーに交代！ストックが零になった時点で負けだ！」

チームは先ほどの組み合わせで充分だろう。

俺達Aチームが選択したのは中級者向けのリ クで俺の愛用キャラだ。

Bチームはマ スだ。そういえば一夏の奴マルス得意だったな。

Cチームはオールマイティなマリ 。っていうか、シャルロットは

ともかく、セシリアはコントローラーを握った事あるのか？まあいいや。

順番は、Aチーム・メアナ 魅緒 俺、Bチーム・箒 ラウラ 一夏、Cチーム・シャルロット、セシリア、鈴の各順番だ。それじゃ、ゲームスタート！

輝羅「つしゃ、勝った」

一夏「（なーんかはしよられた様な気が……）」

輝羅「一夏、細かい事は気にするな」

さてと、また色々やりたい事は……ってあれ？

輝羅「なあ、メアナ何処行った？」

箒「メアナなら、手洗いを借りると言っただが……」

セシリア「先程私もお手洗いに行きましたけど居ませんでしたわ」

まさかと思った俺は、イケニッションブースト瞬時加速並の速度で2階へ走り、俺の部屋に突入する。

ドアノブに手を掛け開いた瞬間、俺は目を疑った。何故ならメアナが正座で俺の秘蔵の本を読んでいた。

輝羅「メアナああああ……！」

メアナ「お兄ちゃん、不潔でござる」

見るな、そんなクズに向けるような視線を俺に向けるな！向けるなら犯罪者に、もしくは、どこぞのニンニク好きで黄色くて屁をこき尚且つ金の亡者であるワ　オに向けるべきだろお！

そして、俺の背後で一夏達登場！ああ、俺の人生オワタ。

場所は変わってリビング。俺は正座をさせられ、女子達は俺を囲み俺の目の前には先程メアナが読んでいた、俺の秘蔵の萌え本数冊。味方は魅緒だけだった。

輝羅「……」

メアナ「お兄ちゃん、正直に言うでござる。これは、何でござるか？」

メアナ同様箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ達は俺を蔑む様な目で見ていた。

メアナは俺の萌え本に指を指して言った。俺は正直に答えるしか無かった。

輝羅「……………未確認との戦闘で擦り減らした俺の心を癒してくれるマストアイテム。だが、三次元ではなく、二次元だ！！」

箒「堂々と言うことが！」

箒はそういい、竹刀で俺の頭を叩いた。

確かに堂々と言うことではないが、何も強く叩く必要も無いだろうが。

メアナ「お兄ちゃん、ちよっつっつと痛いでございますが、我慢するでございます」

一夏「生きてるか？」

輝羅「……………多分」

今まで何処に行ったのか分からない一夏が、顔面痣とこぶだらけで解放された俺にそう言った。

因みに、魅緒は仕事があるらしく俺リンチ中にマネージャーの車に乗って帰って行った。箒達は俺の萌え本を廃棄することはしなかったものの、ストックしておいたお菓子を九割を食べていた。そう、今も。

輝羅「なあ、一夏」

一夏「どうした？」

輝羅「男が変態で何が悪い？」

一夏「あー、いやあ、難しい所だな。それにしても、お前の部屋以外にスッキリしてんだな」

輝羅「さっきの萌え本がベッドの下にあった以外はな」

とにかく俺は、明日も平和になって欲しいと願うばかりだった。

続く

第六話 再会（後書き）

次回

相次ぐ転落死がIS学園の付近で起こっていた

輝羅は生徒会長に呼ばれる

そして、青のクウガが

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【転落】

第七話 転落（前書き）

今回もオリジナルで行きます

時系列は鈴音が一夏にプールのチケットを渡した時間帯です

第七話 転落

俺は今、中学時代の友人の家で定食屋でもある五反田食堂で昼食を摂っていた。野菜炒め定食を食べている。

輝羅「（ああ、日本人でよかった）」

そう喜んだのもつかの間。俺は代金を払い店を出ると…。

楯無「はろー」

学園の生徒会長が店を出た俺を待伏せていた。

そして捕まらまいとダッシュで逃げ出す俺を、生徒会長はテキサスのカウボーイの様に縄で輪を作り、頭上で回し、追う。

楯無「ちよつと逃げない出よー！きれーなおねーさんからどうして逃げるのー？」

輝羅「いやいやいやいや！おかしいでしょ、追い回してるでしょー！」

因みに、生徒会長は学園でメツチャクチャ強い。もうこの人一人で福音相手にした方がいいと思う。

つか逃げないと俺の操が、操があああ！！

輝羅「うおおおお！！アンタと関わったら、俺の人生Bad Endですから！！魅緒お！」

そして逃げ回る内に、あえなく俺は生徒会長に捕まってしまった。

輝羅「連続転落死事件？」

楯無「そ、最近この近くで学園の生徒じゃ無いけど、イロイロと迷惑かけてる輩が次々に転落してんのよね」

転落死……ってことあ…。

輝羅「ということは、6号ですか？」

楯無「ええ。地域の監視カメラに飛蝗のような未確認が映ってたの見て」

先程と打って変わって会長は少し抑えめな声色で俺にその監視カメラの映像を見せた。

ほんの一瞬で、我が物顔で歩いていた男は素早く動く影に上に連れ去られ、そして転落し命を落とした。

今度のゲゲルは……もしかして…。

輝羅「未確認は、もしかして……」

楯無「そ、4号……いいえ、響輝羅君。貴方が目的なはずよ」

さすが生徒会長。4号^{クワガ}—だっていう事を知っていたか。

輝羅「だとしたら、何であいつらは直接俺じゃ無くて、関係も無い人を？」

楯無「おびき寄せる……………餌だしたら？簡単に説明出来るわ」

俺をおびき寄せる？馬鹿な！ただそんな為に何の関係も無い人間を殺すんだよ。いくら怪人で戦闘種族だったとしても、これは許される事じゃない。

輝羅「俺、何の為に戦ってきたかもう……………」

楯無「わからないじゃ済まされないわ。おねーさん、そんな弱気な男のコ、嫌いよ？」

生徒会長がそう言うんじゃ、俺しか出来ねえって事か。

輝羅「俺、やります。っていうか、これ以上誰も死なせたくない。これ以上、誰ひとり笑顔になれないなんてもう嫌なんです」

そう言っただけ俺は退室する。もう誰も死なせたくない！死なせたくないんだ！！

さて、まずはどうすっかな。おびき寄せるっただけ、今の俺はどうすればいいのか？
そんな俺の悩みもいざしらず、何かのチケットを持った鈴がスキップで現れる。

輝羅「どうした鈴。何をそんなに」

鈴音「えへー。一夏とデート出来るんだー、プールでー」

へー、もうプールの時期か……っていうかこの前福音騒ぎ以来じゃねーのか？ま、鈴にとっちゃゴタゴタしていたからいいかもな。

輝羅「そっか。ま、頑張れよー」

鈴音「あーい」

さてと。一夏の事だ、チケット渡されてもデートだとは気が付かんだろうに。

ま、一時の夢でも見るんだな。

奴はこの学園の周囲で次のゲゲルを行う見たいだ。なので俺は、オーブンカフェでコーヒープレイク。

もう何杯目なのかわからない位飲んだかわからなくなってしまった俺は精算を済ませた。

かれこれ30分ほどたったというのに、断末魔の叫び声が聞こえて来ない。

輝羅「駄目だ……どこにいるんだ、飛蝗野郎」

すると、俺の視線の先でドラマの撮影だろうか、魅緒がカメラの前で芝居していた。

あ、そういえば今日は【市藤^{いちふじ}仁多^{にたか}可参^{さん}茄子^{なすび}】の収録だって、言っただしな。

俺が魅緒に向けサムズアップすると、魅緒もお返しに俺に向けサム

ズアップをした。あっちも気が付いていたか。

「ハア…ハア……魅緒たぁーん！」

「も、萌えますぞぉ！」

若干二名勘違いな奴がいるが、あいつらは魅緒に被害は出さないだろう。……多分。

路地裏を歩くこと四分。

俺は5号事、飛蝗怪人ズ・バザー・バを見付けた。

ズ・バザー・バ「また会ったな。クウガ！」

輝羅「变身！」

ズ・バザー・バが言うと、俺はすかさず变身。その際、落ちていた鉄パイプを広い变身したため青のクウガに变身した。

クウガD「俺をおびき寄せるたぁ、随分賢くなったじゃねーの？」

ズ・バザー・バ「言うな。冥土の土産に教えてやろう」

何をだ？

ズ・バザー・バ「今回のゲゲルはベ集団も又集団も参加が可能」

クウガD「え、ンにラに、ゴ・メ・ズ以外にも、あるのか、グロンギは」

ズ・バザー・バ「そうだ。だがもう教える事はない。前回と違い、そう簡単に倒せると思うな!!」

クウガD「バーロー! やられてたまるかよ!」

奴^{バザー}の飛び蹴りを、ドラゴンロッドで払った俺は、追撃を食らわす。

クウガD「おらっ!」

ズ・バザー・バ「があっ!」

バザーが落ちた地点は、ゴミが積んである場所。起き上がるバザーの頭に、悲しいまでに魚の骨が刺さり、バナナの皮が乗っていた。

……ギャグ補正って奴か? 何かあいつがちよっぴり可哀相な気が…。

ズ・バザー・バ「ぐう……。まだだあ……。んう!？」

すると何処からか、匂いが周囲を立ち込めた。

この気味が悪い匂いは俺でも分かる。腐臭だ。生ゴミの中に腐った生ゴミがあつたのだろう。

ズ・バザー・バ「命拾いしたな」

そういうと、バザーは建物の上へと逃げ出す。

俺は変身を解き、路地から出た。

魅緒達は撮影が終了したのか、もう退却している。俺もそろそろ寮

に戻るかな。

その夜。俺は一夏に昼間の事を聞いた。

輝羅「そういえば一夏」

一夏「どうした？」

輝羅「昼間鈴に会ったんだが、あいつお前に何か渡してなかったか？」

一夏「ああ。プールのチケットな。あれの日付、俺ちょっと手が放せない用事があったから、セシリアに渡したぜ」

ああ、鈴哀れ。

輝羅「何て言って渡したんだ？」

一夏「ん？ただ渡して、集合時間教えたただけだが…」

馬鹿だ。自分は行けないからとか言えないのか？

ま、いっか。一夏だし。

そしてセシリア、哀れ。

時は進み深夜。

とある場所、バザーは人間体となり「クウガ（輝羅）」に付けられた傷が癒えぬまま、壁に体を預けていた。

バザー「クウガあ……おのれえ……」

「哀れだ、バザー」

バザーが声のする右側を見ると、筋肉隆々の男が立っていた。その男は姿を変え、サイ怪人のズ・ザイン・ダがそこにいた。

ザインはバザーを無理矢理立たせ、その腹に自身の角を突き通した。

ズ・ザイン・ダ「貴様は、ゴウマより使えぬ男だ。部下の世話には疲れる」

ズ集団の首領のザインは、バザーの亡きがらを、近くの海に投げ捨てた。

俺は朝刊を読み、バザーを逃がした事に後悔した。

バザーは身元不明死体とされ無縁仏になったと書かれていた。死因は腹部の刺し傷。傷の大きさからすると、まるでサイの角に刺された様な傷だと書かれていた。

輝羅「……………ザイン…てめえかよ……」

続く

第七話 転落（後書き）

次回

水面下に活動するゲロンギ

輝羅はたまたま寄った店でトラブルに遭う

戦わなければ、生き残れない

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【障害】

第八話 障害（前書き）

今回もオリジナルな展開がありますので、読みたくない、そういう方は回れ右で退室下さい

そして、これからも応援して下さいの方々、クロスオーバーは大丈夫ですと言う方はお進み下さい

第八話 障害

輝羅「ダァーッ！」

メアナ「行つて、ファンゲ！」

俺は今、メアナと模擬戦闘を行っていた。これは生徒会長が提案したものだ。

会長いわく一夏は若干だが弱い部類に入るらしく、変わりに俺のデータを取りたいらしい。

そんな俺は今、メアナの放つダークネス・サイスのファンゲを避続ける。

メアナ「そこお！」

輝羅「なっ！」

回避地点を予測してか、掌部ビーム砲が俺に向けて発射した。俺はそれをシールドで防ぐが、メアナの姿が見えなくなった。ワンオフアビリティーのファントムモードか……。

輝羅「……何処だ」

メアナ「ここだよ！」

輝羅「うおっ！」

突如ファントムモードを解除し、ダークネス・サイスの斧状のダークネス・アックスという部分で俺をたたき落とした。

楯無くはい、そこまでえ！ごくろーさまあ！！>

輝羅「あー、やっと終わったー…つかメアナつえーな、マジ完敗だ」
メアナ「いやいや、お兄ちゃんも強いでござるよ。ファングを切り落とすなんて、至難の技でござる」

アリーナを出る俺等二人は更衣室を前に一旦別れた。実は今日の模擬戦は俺とメアナの賭け事なのだ。俺が勝てば、和菓子に合う緑茶をメアナに煎れて貰う。メアナが勝てば、今日一日俺はメアナの荷物持ち。なので、メアナが勝ったので後者が当て嵌まる。

私服に着替えた俺達は、まずバスに乗り目的地まで移動する。その中で、俺達はあの二人を目撃する。

輝羅「お、シャルロットとラウラ。何だ？お前等も買いもんか？」

シャルロット「うん。実はちょっと新しい服をね。後はラウラのパジャマ」

あー、そういえばラウラは生粋の軍人だから、寝巻とファッションには疎いみたいだ。その本人はバスの窓の景色バツカリを見ていた。

シャルロット「それと、僕の事はシャルでいいよ」

輝羅「ああ、いいぜシャル。っと、そういえばこの先のショッピング

グモールで美味しいカレー屋があるんだけどさ、昼メシどうだ？俺奢るぜ」

時は進み、昼時になった。美味しいと評判のカレー屋は、何故か潰れていた。

俺はその跡地を見て、両膝を着きうなだれた。

輝羅「嘘だろ……ウゾダンドコドーン!!」

メアナ「（お昼……どうするでござるか？シャル殿ラウラ殿）」

ラウラ「（私は別に食べられれば問題は無い）」

シャルロット「（輝羅が可哀相だよ……）」

輝羅「いいんだぞ、声に出しても」

そして昼食はオシャレと評判のオープンカフェ。メニューの中にカレー関連は無いが、このコーヒ―は美味しいと店員さんが言った。そして俺の真後ろで、スーツを着た女性が「ああでもない」「こうでもない」と頭を抱え悩んでいた。俺とシャルは気になり、その女の人に声をかけた。

輝羅「あの……」

シャルロット「……どうしたんですか？」

するとその女性は振り返り、俺ら四人を見て叫んだ。

「これで決まり！」

何が決まりなのか、俺達は分からなかった。

「それじゃ、よろしくね」

連れて来られたのはメイド&執事喫茶。俺とシャルは執事の格好でメアナとラウラがメイド服だった。

先程の女性はこの店の偉い人で、従業員が急に出勤不可能な状況になり、先程のオープンカフェで唸っていた。そこを声をかけた俺達を見て、臨時の従業員を見付けたのだ。

輝羅「お待たせしました。御注文の【乗ってけコーラサーバー】と【不死身のアイスクリーム】でございます」

シャルロット「お待たせしました、アイスコーヒーです」

ラウラ「コーヒーだ。何？頼んでない？貴様等客だろう」

メアナ「アイスティーでございます。ゆっくりしていつてござるよ」

取り合えず、頼まれた事だし精一杯頑張ろうと思い、接客等の仕事を請け負う。そんな中、ラウラのSに萌える男達がいたが、俺はさほど気にはしなかった。

何事も無く、ただただ時間だけが進んでいた。意外と俺はこの仕事

にやり甲斐というものを芽生えてしまった。
ただそれも、一瞬の内に崩壊した。

「うおら！てめえら動くんじゃない！ぶつ殺すぞ！！」

突如、店に逃走中なのか、銀行強盗が目だし帽を被り、マシンガンやら拳銃を握り、現金が入っているだろう麻袋を担いでいた。漫画に出そうな銀行強盗って恥ずかしく無いのか？そんな格好だった。物影に身を隠す俺等4人以外に、客が6人、店員3人の計13人。あいつらはこの人数を人質に警察への要求を開始した。

「いいか！人質を殺されたくなければ、まず逃走用のワゴンを用意しろ！！発信機の類なんぞ付けてみる！ワシ等には、それを見付ける優秀な人材がある！！」

何処で勧誘したんだ？

小岩くわ、分かった。発信機は付けない！直ぐに手配する！>

あれ？拡声器から聞こえて来る刑事さんの声に聞き覚えがあるな。そうか、確か捜査一課の小岩さんだ。だったら一暴れすつか。

輝羅「ラウラ、ぶつつぶすぞ」

ラウラ「銀行強盗をか？」

輝羅「手伝えば、特製一夏プリントハンドタオルを贈呈するんだが

……」

ラウラ「指示に従うぞ、k」

輝羅「おっけい！」

まずはっと。

輝羅「シャルとメアナは俺とラウラが銀行強盗をぶっ潰してる間に客と店員の避難誘導を頼む」

ラウラ「私とkが敵を排除と同時に裏口から避難しろ」

メアナ「了解でござる！」

シャルロット「（戦う執事と戦うメイドかあ……）うん、分かった！」

輝羅「んじゃラウラ、逃走用のワゴンが来たら作戦開始だ！」

ラウラ「了解した」

後は、小岩さんにちよっとメールを……転送！
携帯はマナーモードにしてっから、あいつらに気付かれる心配は無い。

頼むぜ……小岩さん！

小岩「おい、ワゴンはまだか！」

巡查「もう少しです。しかし……」

小岩「しかしどうしたんだ？」

巡查「先程避難に成功したオーナーから、人質のリストを提出させて頂いたんですが……その中にIS学園の生徒四人がいるんですよ、ほらこの通りです」

小岩は巡查から受けとったリストを見た。途端、強張った表情をしていた小岩の顔が緩み、その場に居た警官隊に向かって言った。

小岩「君達は実に幸運だ。人質の中に、この状況を覆す馬鹿がいる！」

それを聞いた警官隊は首を傾げ、何言ってるんだこの人はと言わんばかりの表情で小岩を見ていた。

その中の巡查二人がこそこそと呟いた。

「なあ、小岩さんの伝説って本当なのか？」

「伝説って？」

「あれだよ、警視庁未確認生命体対策本部の一員であの未確認生命体第4号と共闘したって」

「そうらしいぜ。何でも、未確認と何度も邂逅しても生還してんだぜ？ある意味無敵だよ」

小岩「聞こえてるぞ、無駄口は余りたたくな」

小岩は携帯に届いていた輝羅からのメールを読み取りながら、巡查

二人に注意した。

小岩「（響さん、いつもながら貴方は無茶しすぎですねえ）」

輝羅「いいかラウラ、作戦はさっき言った通り。俺が合図する」

ラウラ「私が先に先制し、奴らの死角からkが突く！」

輝羅「上等！」

俺はサムズアップし、そうしゃべり、手を一旦高く上げ振り下ろす。ラウラが手前の出っ歯をなぶり、左右にいた双子の顔面に拳を突き出す。

残るは親玉。俺は壁を蹴り、親玉に近付く。このまま踵落しで奴の脳天を蹴り飛ばせば……。

「んん……………」

輝羅「やっべ！」

「おらあ！」

輝羅「……………っがはっ！」

ちいつ、気付かれたか。にしても、俺の足を掴んで下にたたき付けるたあ……………並じゃねえな。

「おお？あんだよ人質殆ど逃げてんじゃねえか！！」

つてこたあ、シャル達は脱出に成功したって事か。

「ハッ！もう人質などどうでもよい」

輝羅「あんだと……」

突如俺を、銀行強盗の頭はラウラとのびてる部下を無視し外に連れ出した。

警官隊が見守る中、俺を解放した。

輝羅「なあ……銀行強盗してまで……一体何が目的だ。答えるよ！」

「焦るな。ゲゲルの目的が今達成された……」

輝羅「ゲゲル……ってまさか！」

「その通り！今回の俺のゲゲルはリントの金と呼ばれる紙切れを強奪し、リントが集まる建物に籠城する。それが今回の俺のゲゲルだ！」

輝羅「……………」

その他『……………』

駄目だこいつ。完っ全に頭逝かれてやがる。

すると、その銀行強盗の頭はみるみるうちに未確認生命体第八号ごとメ・バヂス・バに変身した。

輝羅「バヂス!？」

メ・バヂス・バ「さてと、今日からは俺はゴ・バヂス・バだ!」

輝羅「させねえよ! 変身!」

俺は小岩さん率いる警官隊とラウラとシャルそしてメアナ達の前で変身する。クウガへと。

黄色いクウガタムシの様な角、赤い鎧に赤い瞳、黒いボディ、そして霊石アマダムを詰め込んだ古代のベルト・アークル。これが、俺のもう一つの姿だ。

クウガM「馬鹿馬鹿しいゲゲルだけでもよお! お前に一つ聞きたい」

ズ・バヂス・バ「何も教えぬ。間抜けなバヅーの下へ引導を渡す!」

クウガM「うぜえんだよ! 虫頭!」

強気で言う俺だが、バヂスは得意のスピードで俺を翻弄する。奴は常に俺の死角から攻撃する。奴の得意とする技は上空から針を放出、狙ったターゲットの脳天を撃ち抜く。そろそろ俺も限界か……。

クウガM「何処だ!」

ズ・バヂス・バ「ここだ!」

クウガM「ぐあっ…!」

ズ・バヂス・バ「これでとどめだ。今楽にしてやる」

そういうとバチスは羽を響かせモチーフの蜂の様に空高く上昇する。
手は、今しか無い！

クウガM「小岩さん、拳銃貸してください！」

小岩「ほいきた！」

小岩さんが俺に向かって拳銃を投げ渡し、俺はそれを受け取る。
左手を引き、拳銃を握った右手を動かし、俺は叫ぶ。

クウガM「超変身！」

たちまち俺の姿は緑色の防弾チョッキの様な形になり、左肩だけに
シオルダーアーマーが出現し、バックルと目は緑色に変化する。
緑のクウガ、ペガサスフォームだ！

クウガP「すう……」

意識を一点に集中し、持ち前の超感覚で上空のバチスを捉える。
奴が針を放出し、それが俺に向かう。スレスレの所で針を指二本で
払いのけ、拳銃から原子レベルで変換されたペガサスボウガンの弓
を引き、バチス目掛け引き金を放つ。

クウガP「ハッ！」

ズ・バチス・バ「うがつ！」

上空でバックルに直接当たったのか、空中で爆破した。青空に見え
る爆炎をバックに、俺は変身を解く。

使用時間ギリギリだったのか、変身を解いたその瞬間俺は真っ直ぐ立ち上がる事が出来なかった。それを心配（友人としてなのか）してシャルとラウラが近寄る。

シャルロット「大丈夫？輝羅」

ラウラ「お前、拳銃も扱えるのか？」

輝羅「あんまし触った事は無いな、出店の射的以外。緑のクウガに変身するときは、いつも小岩さんから借りてたし」

野次馬に警官隊もいつの間にか撤退していた。

すると、メアナが俺に近寄り、いつも見せない憎悪の目で俺を見ていた。そういえば、俺メアナの前で変身しなかったけ。っていうか、何でメアナそんな目で俺を？

メアナ「……4号って……お兄ちゃんも未確認なんでござるか！！」

突然強い口調で俺に食ってかかるメアナ。その目は涙で溢れていた。

メアナ「私の両親は……数年前、ここ日本に来てたでござる。だけど、未確認生命体第10号に殺されたでござる……！」

輝羅「メア」

メアナ「だから、私は未確認を一生許さないでござる。勿論、二号も四号も！」

そう言い残し、メアナは学園へ去って行った。

ギイガの時かぁ……そういえば、犠牲者の中にカナダ人がリストに

記載されてたつけ。

輝羅「俺、皆の笑顔の為に……戦っていた筈なのに……」

シャルロット「……」

輝羅「ハハ……なっさけねえな、俺」

ラウラ「世の中良いこともあれば悪いこともある。だが問題は……」

輝羅「……なんで未確認生命体^{グロンギ}が復活したかだ」

シャルロット「ぐるんぎ？なにそれ」

輝羅「戦闘種族グロンギ。超古代の時代に殺戮ゲームを行っていた集団。怪人体とは別に人間体があるが、その人間体は普通の人間と同じ構造になってんだ」

それから俺は、ラウラとシャルにグロンギについて話した。階級・モチーフとなるもの・奴らは自分の地位を上げるため人殺しという名のゲームをしている。そう言った。そして、クウガに選ばれた人間もまた、いずれグロンギと同じ様になるかも知れないと。

輝羅「元々このベルト、とある遺跡の中にあっただ。棺の中にあっただ古代日本人のミイラの腰にな」

ラウラ「古代の日本にそんな技術が？」

輝羅「さあな。俺もこのベルトの事あまり知らないし。悩んだって仕方ないし、そろそろ帰るか」

シャルロット「それでいいのかな？」

輝羅「大丈夫大丈夫！」

続く

第八話 障害（後書き）

メ・ギイガ・ギ
未確認生命体第十号の復活

輝羅の16回目の誕生日

そして、解かれる誤解

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【紫紺】

第九話 紫紺

あれから数日。メアナは極端に俺から避けていた。今まで親しかった妹分は、箒相手にはいつも通り。

そんな今日は普通の高校で言う当校日の様なもの。俺は、蒸し暑い廊下を歩いていた。

輝羅「あぢい……廊下だけかよ、冷房が効いてないの」

当たり前な事を呟く俺の背後には、いつもながらの六人プラスメアナが歩いていた。
教室には一番乗りなのだろう、生憎冷房は付いていない。

輝羅「あつづ……。こう暑いと、頭おかしくなっちまうな……」

一夏「一応聞くけど、一足す一は？」

輝羅「…3……」

一夏「こりゃ重症だ……」

暫くすると、授業開始と共にクーラーが付いた。そんでもって生き返る！ああ、人類の進化って素晴らしい。

ホームルームの時間になると、山田先生が転校生が来ているという。何でも、転校生はアイドルだという。その転校生は織斑先生の声に従って、入って来た。

千冬「園田、入って来い」

入って来たのは、碧色のロングヘアをなびかせる少女だ。
その少女を見た一夏、箒、セシリア、シャル、ラウラ、そして俺は
自分の目を疑った。

魅緒「園田魅緒です。よろしくね」

適合出来たんだ…。

魅緒は一応アイドルなので、クラスの女子の中に幾らかファンはい
たようだ。その中に百合臭がしたが、まあいい。

時間が過ぎて、昼食時。俺はコーヒーとから揚げ定食を頼み、魅緒
はタラコスパだ。向かい合う様に席につき、身の上話等をした。

輝羅「てか、仕事はいいのか？今夏だろ？写真撮影だったり、PV
制作だって、今頃だったろ？」

魅緒「ふっ、甘いね。実を言うと……」

輝羅「実を言うと………？」

魅緒「特に無いんだよねー、理由！」

少しでも意外な答えを期待した俺が馬鹿だった。
その後、俺は魅緒にメアナにクウガの姿を晒した事を話す。勿論、
仇の方も。

魅緒「坊主憎れば袈裟まで憎いって奴ね」

輝羅「とんだとばかりだ。ただ、ここで俺の正体クウガを知っているのは、一夏と一夏ラブの連中、生徒会長と織斑先生と山田先生とメアナ位だ。因みに、生徒会長は二年でありながら学園最強のIS使いだ」

魅緒「そーそー。メアナちゃんと言えば、私あの娘と同室なのよ」

輝羅「そっか。言つとくけど、あいつ日本刀集め趣味だから」

魅緒「へえ。意外と日本大好き少女なのね」

会話しながらの食事はいいものだ。

外を見ると、次第に雲行きがややしくなり、雷が鳴っていた。嫌な予感がする。当たらなけりゃ、いいんだが。

また時は進み、本日最後の授業。雨が強くなり、雷も強くなっていた。俺の思っていた嫌な予感はそれじゃ無かった。

ふと外を見ると、男が立っていた。立っているのだが、その男は傘を差さずポツンと立っていた。それもこの敷地内。男は両手をあげると、烏賊の様な姿に変わる。

千冬「未確認!？」

輝羅「10号……ですよね?」

すると織斑先生は俺に耳打ちする。

千冬「生徒の避難に紛れ駆除しろ」

輝羅「了解です」

山田先生と織斑先生が未確認生命体第十号を確認し、避難命令が出された。テキパキと移動する生徒達とは別に俺は人気の無い廊下で窓を開け、飛び降りながら構えた。

輝羅「变身！」

着地と同時に、俺は紫のクウガことタイタンフォームに変身した。近くに落ちてた鉄パイプを広い、専用の剣、タイタンソードに変えて、ギイガに詰め寄る。

メ・ギイガ・ギ「久し振りだな、クウガ」

クウガ「ああ、久し振りだな。また、一発で仕留めてやるよ」

鋼の鎧を宿す紫のクウガは、ギイガの墨爆弾でも見事防ぐ事が出来る。それを利用し、俺はゆっくりと接近する。

墨爆弾の発射の後に、一定時間冷却が必要だが、この豪雨のお陰で冷却しながらの連写が可能だ。

鋼の鎧と止まない墨爆弾。さあて、どっちが勝つかな烏賊野郎。

クウガ「叩き切る！！」

メ・ギイガ・ギ「小癪な！！」

俺が切るとギイガは避け、ギイガが墨爆弾を吐いても鋼の鎧でダメ

ージは軽減される。若干ダメージが微弱に蓄積される俺の方が不利だ。けれども、斬撃は当たらない。あいつも腕を上げたと言ったことか？

メ・ギイガ・ギ「どうしたクウガ。以前は俺がやられてしまったが、今度はお前がやられる番だ!!」

クウガ「ほざけえ!!」

激しい雷雨の中、俺は必死にギイガに攻撃を再会するが、当たらない。

突然、俺とギイガの間に黒いISが現れる。それは見間違えようもない、ダークネス・フアントム暗黒の幻影だった。

クウガ「よせメアナ! 退くんだ、死ぬぞ!」

メアナ「だから何!? こいつは私の両親の敵なのよ!!」かたき

メアナはギイガにダークネス・サイスを向ける。ギイガは何が入ったのかわからない様子だった。俺には分かる。ギイガは自分の地位を上げようと、無関係の人を殺し続けた。その中には、メアナの両親もいたはずだ。いや、いたんだ。

メアナ「行つて、フアング!」

無数に飛ぶビツトは矢次にギイガに当たる。そこにダークネス・フアントム唯一の射撃兵装の掌部ビーム砲が放たれる。ギイガはそれを何と墨爆弾で相殺する。ダメージは蓄積され、ギイガはよろめく。トドメを刺そうとメアナはダークネス・サイスを大きく振りかざした。

メアナ「これで……トドメよ!!」

これで決まった。

しかし俺は、あいつと一度戦闘した事があるからよく分かる。モチ
ーフもだ。

烏賊の足のような触手がダークネス・サイスを搦め捕った。

クウガ「下がれメアナ! コイツはISで倒せるほどやわじゃねえ
!!」

メアナ「お兄ちゃんは黙って!! コイツは私が……!」

メ・ギイガ・ギ「小癪な!」

クウガ「危ない!」

ギリギリに俺は間に合った。ギイガとメアナの間に入ることによつ
て、墨爆弾はダークネス・ファントムには当たらず、俺の鋼の鎧に
阻まれる。

クウガ「おりゃああ!!」

俺は封印のエネルギーが刃の切っ先に溜まったそれをギイガの胴体
に突き刺す。ギイガは断末魔の叫びをあげ、爆発する。

あのあと、未確認騒ぎで授業は早めに終わった。

食堂には俺と一夏の他に魅緒と箒にセシリアと鈴、そしてシャルとラウラとメアナの九人しかいない。

メアナはと言うと、敵を先に討たれた事で、俺に敵意MAXな視線を送っている。

輝羅「……正直、メアナの両親を護れなかった事は、今でも悔やんでも悔やみきれない」

メアナ「今更なんでござるか!!」

輝羅「確かに、こんなの今更だよな。俺のこの手が届かない所で、人は笑顔を失っていく。そんなのが嫌で、俺は後悔したくない。そう思ったんだけど、それはただの理想論だという事も……」

俺は頭をうなだれる。グロンギと戦う度に、俺は心を擦り減らしてきた。流して欲しくない涙をみたときが一番そうだ。

メアナ「でもお兄ちゃん。憎く無いでござるか？未確認が人殺しをしてしまう事を！」

輝羅「勿論悔しいさ、憎いさ!!だけどよ、駄目なんだよ……」

一夏「どういう事だ……」

輝羅「俺は一度、憎しみで心が一杯になった時があったんだ。俺とそんなに歳も変わらない奴らを殺しつつけたそのグロンギを相手にした時、……絶命した一体のグロンギを何回も何回も、この手で……握った剣で刺しつつけた」

まさか、輝羅が……こんな事を言うとは考えも付かなかった。

輝羅「俺は一度、憎しみで心が一杯になった時があったんだ。俺とそんなに歳も違わない奴らを殺しつづけたそのグロンギを相手にした時、……絶命した一体のグロンギを何回も何回も、この手で……握った剣で刺しつづけた」

俺は、輝羅がそんなに憎しみの心で戦った事があるのだと初めて知った。

輝羅は普段は口は少し悪いが、優しい心の持ち主だと、俺は知っている。知っているからこそ、さっき輝羅が言った事が意外で堪らなかった。

一夏「なっ、なあ輝羅……人間誰しも人を憎む事もあるだ

」

輝羅「爆炎の中……俺は見た。凄まじき黒の瞳の戦士が、……その時の俺と同じ倒し方をしていたんだ」

中学生が未確認のターゲットになっていたというニュースは、俺も見ただけがある。その時の未確認を、輝羅が憎しみで一杯になっていたなんて……。

輝羅「……………」

あのあと、俺は先に自室に戻り、ベッドになっところがっていた。メ

アナには悪いけど、俺はそんなに強くは無いんだ。

すると、ドアをノックする音が聞こえてきた。誰が来たのか、俺は確認するために、ドアを開く。

魅緒「はろろん」

輝羅「お前は何処の園崎だ？」

魅緒「まあまあ。それよりもさ、今日が何の日か覚えてる？」

輝羅「今日か？8月の上旬に何があるんだよ」

魅緒「はあ……輝羅ったら……。食堂行かない？」

輝羅「あ？……そうだな、そろそろ腹減ってきたし」

魅緒「なら早く早くうー！」

輝羅「つおわ！」

魅緒に強制連行され食堂に着いた。何があるのか解らないのが今の所悩みである。

入って数歩歩くと、一斉にクラッカーが鳴り放たれたカラーテープが俺を包む。

「「「響君、HAPPY BIRTHDAY!!!!」」」

輝羅「……………はい？」

はっぴーばーすでー？あれ、今日って俺の誕生日だっけ？

魅緒「誕生日おめでとう、輝羅」

魅緒はそういうと、俺を特等席らしき場所に連れていく。色々あったけど、確か今日だったな、俺の誕生日。忘れてた…。

薫子「お誕生日おめでとう響君」

輝羅「薫先輩?! バースデーインタビューでもする気ですか?!」

薫子「それもあるけど…。君は何時からリア充なのかあ? それも幼馴染みの」

輝羅「……魅緒?」

魅緒「ごめん! 詰め寄られて……つい……」

その時、「あゝん! 狙ってたのにいゝ!」とか「結構好みだったのに……!」等と聞こえた気がした。ふと気が付くと、一夏達はいない。これを予想したのか、それとも別な場所で一夏争奪戦でもやっているのかここにはいない。

結局解放されたのは二時間後。ほぼバースデーパーティーと言うよりは、ある意味拷問に近かった…。

自室に戻る道中、俺はある人物を見付けた。メアナだ。

輝羅「メアナ……」

そうだ。あいつは俺の事恨んでいたんだっけ。
何を思ったのか、俺に近付き、俺に話し掛けた。

メアナ「お兄ちゃん……御免でござる！」

輝羅「エッ？何謝ってんだ？」

メアナ「私……筋違いな事言ってしまったて、本当に御免でござる！
」

頭を下げ、メアナは再度俺に謝った。

輝羅「いいよ、別に気にするな。元はといえば、俺が……」

メアナ「でも……でも……お兄ちゃんは、私を庇ってくれたでござる。どうしてでござるか？あんなに酷い事を言ったのに……！」

気にしてたんだな、本当に……。

輝羅「……誰かが死んじまったら、別の誰かが悲しむのは嫌なんだ。俺が死ねば魅緒が悲しみ、一夏が死ねば織斑先生や箒達も悲しむ。それでメアナが死んじまったら、俺や箒達もお前のクラスメートの皆も悲しむんだ。そんなのは、死ぬほど嫌なんだ」

メアナ「……お兄ちゃん……ご、め……ん……なざあい……！」

輝羅「こっちこそごめんな。メアナの父さんと母さん守れなくて……」

メアナ「うつ……うつぐ……うええええ……！！」

輝羅「泣きたい時には泣け。その時は、だれかが優しく包んでくれるからよ」

その後、魅緒が合流し、目を真っ赤に腫らしたメアナを連れて帰った。

だが……一体誰がグロンギを復活させたんだ？

転入前の俺を執拗に追ってきた黒服の連中もそうだし……一体誰が……。

続く

第九話 紫紺（後書き）

異世界の戦士

もう一つのフリーダム

同じ顔の男達は、戦うために叫ぶ

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【頑張】

第十話 頑張（前書き）

今回と次回はジュネッスブルーさんとのコラボで次回はユートピアさんとのコラボです。

始まります

第十話 頑張

俺はいつも部屋に差し込む朝日に照らされ目を覚ます。それがいつもいつも今日この日まで続いていた。

えっ？何が言いたかった？それは……

千冬く一年生専用機持ちは至急第三アリーナに集合！未確認のISSの破壊活動を　！！＞

輝羅「なんつー目覚めだよ！おい！！」

そう、未確認のISが何故か出現し、織斑先生の指示の下俺と一夏に一夏ラバーズそしてメアナの八人。

その未確認のISは以前一夏と鈴が相手した機体だそうだ。

そして俺はともイライラしている。

輝羅「消える才才才才才才才！！！」

俺の目の前にいる輝羅は、何故か寝起きが悪いのか、自暴自棄になり、ビームサーベルを両手に逆手に持ち、無双していた。主に武装を。

なんてこった、俺があんなに苦戦した謎のISを……やっぱいい
つは怒らせると千冬姉より厄介だ。

「夏……おかしい……こいつら、以前より……弱くなってる！」

た。

輝羅「俺に……」

それを装着している人物のその顔は、輝羅と…

輝羅「……似ている？」

瓜二つの少年だった。

「……フリーダム？」

輝羅のフリーダムと灰色のカーテンから現れた少年のISはおおまかな所は似てはいるが、輝羅のフリーダムには無い胸にコックピットがその少年にはあった。

二人は、無人機の使用を思い出し、全砲門を開き一斉射撃を繰り返す。これぞダブルハイマツトフルバースト。

無人機の駆除を終えた俺達一行は、生徒会室に居た。その場には無人機を駆除した俺達と、織斑先生、生徒会長、そして俺と瓜二つの男。

灰色のカーテンからフリーダムに似た機体で登場した人物は、俺達に名を乗った。

ユウタ「俺の名は、小野寺ユウタ19歳彼女持ち！」

輝羅「俺は響輝羅。命の響きに輝く修羅という意味で名付けられた。

16歳だ」

ユウタ「にしても、やっぱり他人と思えないな」

輝羅「ああ。所で……何なんだ？あのフリーダムは」

ユウタ「お前のもフリーダムってんだな」

千冬「お前のいる世界でも、ISは存在するのか？」

ユウタ「ええ。というか、デバイスっていうのが主流で、俺のフリーダムは普通にISです」

楯無「ふうむ。とすると、君も未確認生命体第4号なのかな？」

ユウタ「っていうと……」

一夏「貴方もクウガ何ですか？同じ顔ですし」

ユウタ「タメ口でいいよ。でもクウガは父親で俺はアギトだ」

全『あぎと…？』

あぎと……何なんだそれは……。

それに、同じ顔でも、変身する戦士は違うのか？

ユウタ「って言う……輝羅はクウガなのか？」

輝羅「ああ。一年位前から……」

ユウタ「でも他人と思えないよな」

それからユウタは自分の身の上話を言った。

クウガに変身する父と普通の母の間に生まれ、数々の戦いを経験し、フリーダムを手に入れアギトの最強体を手に入れたという。しかも、母は天才でその血を引き継いでいるが、父の馬鹿も引き継いでいるという。つまり、頭は良いけどちょっとした馬鹿なのか？

ユウタ「でー……俺帰れるまで何処に仮住まいした方がいいんだ？」

輝羅「俺の家に泊まった方がいいぞ。丁度掃除しよっかなって」

ユウタ「よっしゃ。交渉成立」

すると、生徒会室に突然人が入って来る。魅緒だ。

魅緒「失礼します。織斑先生、山田先生が呼んで……あれ？輝羅、その人誰？」

一夏「ちょっと待て魅緒。どっちが輝羅か分かるのか？」

ユウタ「お前、ヴァカか？着ている服が違っただろ」

確かにその通り。

俺が少し苦笑いしていると、生徒会室の窓が盛大に割れた。そこにいるのは、ザインとピランがいた。

ズ・ザイン・ダ「ゲゲルの」

メ・ピラン・ギ「始まりだ」

輝羅「ザイン、ビラン!?」

ユウタ「敵?!」

輝羅「ああ。グロンギって種族でな、自分の地位を上げる為に人を殺すゲームを行う最低最悪な存在だ」

ユウタ「へっ。じゃ、変身と行くか」

俺とユウタは並んで立ち、ベルトを出し、叫んだ。

輝羅& amp; ユウタ「変身!」

俺は赤のクウガに変身し、ユウタはクウガに似た戦士に変身した。

ズ・ザイン・ダ「くっ、クウガが……」

メ・ビラン・ギ「二人だと……」

クウガM「確かにそっくりだなユウタ。何て言うんだ、その戦士は」

アギトG「アギト……って言うんだ。言っとくけど、モチーフは西洋の龍だからな」

クウガM「こっちはクワガタだよ」

クウガとアギトは猛進するズ・ザイン・ダとトリッキーな攻撃を上
手く避けきり、細かな攻撃を繰り返す。

アギトがビランの攻撃を避けるとそのビランの背中にクウガが踵落
しを繰り返す、クウガがザインの突進を受け流すとアギトがザイン
の足を払った。

グロッキー状態のビランとザインに向け、クウガとアギトは必殺の
構えを取った。

クウガM「K O O L」（誤字じゃありません）に行くぜ」

アギトG「行くぜアミーゴ！」

クウガは数歩下がり、アギトは足元で自身のライダーマークを浮か
ばせクロスホーンを展開する。クウガが走り出し、並んだ瞬間二人
は高くジャンプ。クウガは空中で一回転し右足を、アギトは左足を
繰り返しダブルライダーキックをザインとビランに繰り返す。

ザインとビランを倒した俺とユウタは変身を解いた。解いたら解い
たで、俺達は腹が減った。そういえば、飯まだだったな。

ユウタ「あー、腹減った」

輝羅「そっぴや俺もだ。今朝から何も食ってないからな」

楯無「いよーし！じゃ今から食堂で大宴会やるよおー！！」

千冬「……呆れて物が言えん」

織斑先生はそう呟き、頭を抱えていた。まあ、確かにそうなんですけどね？生徒会長ですから。

その後食堂では、どんちゃん騒ぎとなったのだった。

IS学園の校舎屋上。そこに灰色のカーテンが現れ、中から一人の男女が姿を現した。

男は筋肉質な体型をしており、女は箒に負けず劣らずの体型をしていた。そしてどちらも、IS学園の制服に身を包んでいた。

「IS学園……だが何か違う」

「本当に何かが違う……」

続く

第十話 頑張（後書き）

次回

新たに現れるIS使い

それは異世界の来訪者だった

黒き牙と永遠の月が空を彩り、その姿をさらす

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【牙月】

第十一話 牙月（前書き）

今回でAGITさんとユートピアさんのコラボは終了です。あ
りがとうございました！

第十一話 牙月

ユウタが現れた今日。無人機が出て来たり、ザインとビランが復活したりで、俺響輝羅は彼女である園田魅緒とその他の愉快的仲間達に慰め励まされ生きている。

ただ、俺の目の前には、またもユウタと同じく異世界から来た男女が居たのだった。

ただこれだけは言わせてくれ。

輝羅「気楽なドリーマー 気ままなドリーマー」

メアナ「お兄ちゃんが壊れたでござるっ！」

俺は疲れが貯まりすぎた時にそう発するのだ。

またも生徒会室にいる俺達の目の前には銀髪で赤い瞳をした筋肉質の男とオレンジの髪に箒に負けず劣らずの良い体型をした女が居る。名は男の方は黒谷終、女の方は音梨楓と言っ。

彼等は俺にこう話した。

終「俺達の世界はお前達の……この世界のISのコアよりも二つ多い」

セシリア「何ですって?!」

楓「それに……こちらの世界では、輝羅さんにメアナさんそして魅緒さんは存在していないんです」

輝羅「また異世界騒動かよ。ツテコトは、そっちにも一夏達は居るんだな」

終「まあそうだな。一夏は箒と恋仲だし、鈴にセシリアにシャルにラウラは楓にべったり百合百合だ」

ISのコアよりも、俺はそっちの意味で驚いた。流石の一夏達はというと、一夏と箒は顔を見合わせる事は出来ない位で、それ以外の四人は、ポカーンと口を開けて何か分からないが、白い塊を出していた。

輝羅「よかったなー、そっちの一夏と箒。……ただ」

終「ただ？ただどうしたんだ？」

ユウタ「多分……萌えだな。絶対発動するぞ」

ユウタの言う通り、俺の中の固有結界が発動した。

輝羅「百合！それは、萌えの極意の一つにして、高嶺の花と等しい程だ！！可愛い女の子同士の絡みは正に絶品であります！！！！甘く甘く、芋羊羹よりも甘く、チョコレートよりも甘い空間が俺達萌え信者達には感じられる！！更に、半裸での絡みは正に極楽以上の極意！！っていうか簡単に言えば、女がBLMO見るのと同じだよっはー！しかも、魅緒程でも無いが、楓見たく【可愛らしい＋ええ体してまんな】効果により、フツの女子でも美が溢れる！溢れ出る！！更に更に……！！」

魅緒「うん。いつもの輝羅だ」

終「いや、おかしいだろ」

ユウタ「それがあいつだ。あいつは、自分の信じる物（萌え道）に正直な男だ」

楓「というか、輝羅さんは一体何を言っているんですか？」

終「知らない方がいい」

暫く、馬鹿やっている俺だったが、またもISによる襲撃を受けた。何かと思い、外に出て確認するとそこには、無人機ISを従えたメ・ギャリド・ギだった。しかも、ギャリドは何故かISを装備していた。

輝羅「輝け、フリーダム！！」

俺は誰よりも先にフリーダムを装着。フリーダム特有のスピードでギャリドにビームライフルを向けながら、寸前で止まった。

輝羅「お前……死んだ筈じゃ……なかったのか？」

メ・ギャリド・ギ「久し振りだなクウガ。このリントの鎧はある組織が我々グロンギに託した物だ。俺の鎧の名は兎^{トラ}蠡^{ラク}闘^{トウ}口^ク」

輝羅「組織……それって、黒服の……」

メ・ギャリド・ギ「正解。では賞品として、その命……貰い受ける！！」

俺に迫るギャリド。その腕にはヤドカリ怪人なのか、ヤドのような槍を俺に向けて迫った。しかし、それは黒いISによって防がれた。それも装着者は終だ。

終「大丈夫か、輝羅！」

輝羅「それが……終の専用機？」

終「ああ。468個目のコアを使ったIS………ブラックファンゲ黒き牙だ！」ブラックファンゲを纏った終と俺を見たギャリドは、獲物を得た獣の様に笑い、槍を構え迫って来る。

メ・ギャリド・ギ「かあくごおおおおお！！！」

俺はツインビームランスを構え、終はハデスという武器を構えて迎え撃つようにギャリドに叫んだ。

輝羅「んなもんとつくに出来てんだよ！！！」

終「喰らいやがれ！！！」

ユウタを筆頭に一夏、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、メアナ、そして楓が戦闘体制に入るが如く、専用機を纏った。

ユウタのフリーダムof the バラエーナとセシリアのブルー・ティアーズのスターライトmk3の火線が無人機を打ち抜き、一夏の白式と箒の紅椿と鈴音の凰龍がすれ違い様に無人機を切り裂く。

シャルロットとラウラがラファール・リヴァイブ・カスタムとシュバルツェア・レーゲンを装着し、楓も自分の専用機を纏う。

楓の専用機、名は永遠の月。エターナルムーンそれが彼女の専用機にして、469番目のコアを使用した機体。

楓「行きます！」

三叉槍・ポセイドンを構えた楓は、シャルロットとラウラに続くかの様に、無人機を刺し貫く。

シャルロット「やるねえ、楓」

楓「あ、はいシャルさん」

ラウラ「無駄口叩くな。輝羅と終が頭を落とさない限り、こちらが不利になる！」

一夏「行くぜ！箒サポート頼む！絢爛舞踏、期待してるぜ！」

箒「あ、……ああ。思う存分やって来い！」

何故か少しだけ二人の距離は縮んでいた。

一夏が零落白夜を放つ度に、箒は絢爛舞踏を発動し一夏にシールドエネルギーを与える。それが繰り返されて行った。

輝羅「らあああああ！……！」

終「はあああああ！……！」

ギャリドに猛進する俺と終はイグニッションブーストを行いながらギャリドの兎糞門口のシールドエネルギーではなく、アーマーフレ

ームだけを削いでいく。

俺のやることが分かつているのか、終は簡単にギャリドのシールドエネルギーを削がなかった。

ギャリド「……何を……する気だ？」

輝羅「こうする気だ！」

俺のフリーダムの五つの砲門が開き、終のブラックファングも同じく必殺技の構えに入った。その終の技は、何処か零落白夜に似ていた。

輝羅「ハイマツトフルバースト!!」

終「ファングクラッシュャー!!」

この二つの技が決まり、ギャリドは死滅。IS・兎蠡闘口もコアだけを残り、塵と化した。

ユウタ「大丈夫か、みんな！」

楓「だい……じょうぶ、です……」

そういう楓だが、数が多いせいか、疲労が溜まっていた。ふと、彼女のもう一つの人格が彼女自身に語りかけた。

（ ふふふ。頑張ってるわね、楓 ）

楓（　　！？……椛？　　）

椛（　　私の力を貸してあげる。だって、貴女の傷付く姿は見たくも無いの　　）

楓（　　……………うん。お願い。行くよ、椛　　）

すると、楓のエターナルムーンはその姿を変えると同時に、楓自身の右目が赤、左目がコバルトブルーに変わりオッドアイになっていた。

これが、楓と楓のもう一つの人格である椛の意志が一つになった双^{デュアル}月の降臨だ。

あのあと、無人機を一掃した俺達の前にユウタと終、そして楓を迎えるように灰色のカーテンが現れた。それは楓が奥の手を使用し、気を失って目覚めた後にだ。

たった一日だったけど、深い絆が、俺とユウタと終には表れていた。どこぞの「宇宙キター！」なヤンキー高校生の様な友情を示す握手をし、ユウタはユウタの世界、終と楓は終と楓の世界へ帰って行った。

ユウタ「さよーならー！」

終「またな」

楓「皆さん、今日はお世話になりました！」

三人は灰色のカーテンに包まれると同時に、灰色のカーテンは消え去った。残ったのは俺と魅緒と一夏と一夏ラバーズとメアナと織斑先生と会長だけだった。

ふと、俺はとある事に気が付いた。

輝羅「　　そういえば、そろそろお祭りあったな。行くか」

篠ノ之神社のお祭りまで、後三日。

その間に、一夏と箒の間が縮まれば良いんだけどな。

続く

第十一話 牙月（後書き）

次回

夏のお祭り…

轟く花火の轟音…

そして、少年と少女は何を見る…

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【御祭】

なんか、ラスト適当ですみませんでした！
そして、AGITさんとユートピアさん、これで宜しかったでしょう？

第十二話 御祭（前書き）

遅くなりました！

冬だと言つのに、話の舞台が夏…

執筆が遅れて…すみませんでした。

第十二話 御祭

実家で朝を迎えた、俺響輝羅は窓を全開にし朝日を浴びた。
やっぱり夏なので、暑い。ほんつとに暑い。

輝羅「だーっ！清々しい朝が台なしだ……」

仕方ないけど、とつと朝飯食うか。

さつさと私服に着替えた俺は階段を降りる。

因みに、基本俺はインドア派だ。何故ならば、ISがこの世に現れて、男尊女卑の時代から女尊男卑の時代に覆ってしまいそれにより法律も増えに増えた。その法律の一つに『女性は見ず知らずの男性にも荷物を持たせる権利の所有を認める』と『男性が上記の法律を違法した場合何らかの罰金と罰則が下される』という様な法律があり、圧倒的に女性が有利になってしまった。

そんな訳で、一度街に出れば誰かも分からん女性から無理矢理荷物持ちにされるので、俺は食事の買い物以外滅多に外に出ない。しかし、お祭りとなると別だ。昔気質のお祭り男がまだいる。いい例が五反田食堂の常連の漢達おにい。時代だ。何もそこまでその法律が強要される訳でも無いだろうきつと。

そんなこんなで、納豆とご飯と卵だけの朝食を食べながら、ニュースを見た。今の所グロンギの動きも無いようだな。

輝羅「夕飯は、お祭りの出店のヤキソバ位にしとくか」

そう言い、俺は納豆を掻き混ぜてから卵を割り、黄身と白身と納豆を良く掻き混ぜ、炊きたての白いご飯の上に載せた。おかずはアサリのみそ汁を初め、卵焼きと焼鮭とお新香そして五反田食堂からおすそ分けで頂いたカボチャの煮付け。

輝羅「にしても、平和だなあ……」

「お兄ちゃん醤油とってでござる」

「輝羅、お新香取って」

輝羅「ほい醤油。ほいおし……ん!？」

あれ？何か可笑しいぞ。俺今一人暮らしだよな、何で、何で……

輝羅「どっから入ったんだ？メアナと魅緒」

メアナ「納豆はやっぱり駄目でござるう……」

魅緒「おいしーよ、特にキュウリ」

輝羅「答える気は無いんだな、そうなんだな」

何でメアナと魅緒が俺の家で朝飯頂戴してんのかね？かたやカナダの代表候補生かたや人気絶頂のアイドルの二人が……朝飯困るほどの要因は無いと思うのだが。

まあ、既に諦めるという事を身につけた俺は、もうどうでもよくなってきた。

食後、俺は二人に何故人ん家で朝飯を頂戴しているのか、理由を聞いた。

魅緒「そりゃあ、篠ノ之神社のお祭りに行くんだもの」

メアナ「日本のオマツリを見たかったもので」

輝羅「成る程なあ……もう突っ込む気にもなれん。それにメアナ、お祭りは夕方辺りから始まるんだ」

メアナ「そうなんで御座るか？」

輝羅「まあ、昔っからそうなんだ。それまでに、何したい？」

メアナ「そーでござるな〜……ウ〜ン……」

輝羅「魅緒は？」

魅緒「そうね、浴衣持って来てるし、着替えて待つわ。部屋、借りるね」

メアナ「私も私もーでござるー！」

結果的には魅緒とメアナは使っていない部屋を貸し、俺は扇風機に当たりながら読みかけのライトノベルを読む。

既に三冊のライトノベルを読み終えた時には、日は真上に上がっていた。

思えば二人の浴衣姿を先程まで何度想像したことか。

輝羅「（んな馬鹿な。俺がリアルに口りに目覚めたのか？しかも三次元……いやいや、考え過ぎだ。何も考えない方がいい方がいい（さてと、そろそろ昼飯作るか）」

浴衣姿で食べられる物は限られている。だが、今日の昼飯は麺類が食いたい俺。素麺や冷や麦が食いたければ、でも麺類はつゆに浸ける物はアウト。だが麺類全般駄目とは限らない。

ヤキソバと焼きうどんが作れる。材料もある。よし、あいつらに聞いてみつか。

輝羅「魅緒ー、そろそろ昼飯だけど、ヤキソバと焼きうどんどうち食いたい？」

襖の奥から魅緒とメアナの声が小さく聞こえた後、魅緒の声で焼きうどんが食べたいと言ってきた。

着付けてそんなにかかるのかね？ま、いつか。

輝羅「……具になりそうなのあったっけ？」

探していくと、海老にピーマンに九条ネギに人参が見付かった。そういえば、メアナも魅緒も好き嫌い無かったし、よしこれでいくか。

それから数時間後、篠ノ之神社に到着すると黒山の人だかりとも言ふべきか、それ程人が集まっていた。むしろ殆ど浴衣の人が多かったな、うん。

着てからというものの、メアナが金魚すくいによーよー釣り俺だけにねだる。おいちよっと待て、俺いまんとこ懷事情やばいんだよ！

メアナ「懷事情なんて気にしないでござる」

輝羅「おまつ、人の心の中を見るな読むな！魅緒からも何とか言ってくれよ！」

魅緒「ごつめーん！寮の金庫にしまったまんまだったわ」

輝羅「嘘だろ、おい」

しばらく歩いただろうか。俺達三人は浴衣姿の箒と私服の一夏と落ち合った。

一夏と箒は俺達に驚いた様だが、俺らは全く気にしない。それに、少しでもおちよくったら、俺の明日と守られる笑顔は無いだろう。

メアナ「お姉ちゃん、お兄ちゃんの財布が毎度可哀相でござる！」

輝羅「お前が潰してんだろうが！……つと、一夏」

一夏「何だ？」

輝羅「久々に射的勝負すつか？今回はでっかい獲物を仕留めた方が勝ちって事でよ」

一夏「乗った！」

一夏は俺の挑戦を一つ返事で返した。射的屋に向かうと、途中で蘭と合流する。

輝羅「あ、蘭か」

蘭「あ、響さん一夏さんこんばんは……」

魅緒「蘭ちゃんおひさ〜！」

蘭「魅緒さん！？お久しぶりです。お仕事お疲れ様です」

魅緒「大変よ、アイドルも。まあ、慣れれば問題無いわ」

少し雑談しながら進み、ようやく目的の射的屋に着いた。

ゲームは先攻後攻で行う。コイントスの結果俺が表で後攻。一夏が裏で先攻という形になった。

俺は敢えて小物を狙う。ここで大物を狙って弾を無くすより効果的だ。緑のクウガで鍛えた射撃能力舐めんなよ？誰に言ってもないけど。

メアナ「……小物ばかりでセコいでござる」

魅緒「駄目だよメアナ。輝羅は小物しか狙わないチキン・ザ・ハードって気にしてるんだから」

輝羅「あんたら揃いも揃って何を言ってるのかなー！」

結果、小物ばかりであったが、全弾命中。だが、やはり俺は大物は狙えなかった。

一夏のターンになろうとしたその時、俺のケータイに通話が入った。相手はあの小岩さんだった。

輝羅「あー、魅緒スマン。小岩さんから電話来てっから皆とお祭り楽しんでてくれ」

魅緒「……もしかして、グロンギ？」

輝羅「まだわからないが、取り合えず電話出とかないとな」

俺はケータイを取り出し、電話に出た。

輝羅「響です」

小岩く響さん、出番です。25号が復活してしまいました>

輝羅「！？奴は…今何処に？」

小岩く詳しい場所は車で迎えに来ます。場所を教えてくださいませんか？>

輝羅「篠ノ之神社です」

小岩くでは近くの交番に来てくれませんか？私もそこに行きます>

輝羅「はい！」

街中を有り得ない程の重さを誇る鉄球を振り回す人外リントの存在は次々に罪の無い人間を殴打し圧殺し撲殺していく。

人外の名はメ・ガドラ・ダ。別名未確認生命体第二十五号。

今回の彼のゲゲルのルール。それは自転車リントに乗る人間の男の殺害。後五人。達成すれば彼は晴れてゴ集団の仲間入りを果たす。しかしそれを阻止するものがいた。

クウガM「バルバル」

突如現れた赤い人がガドラの顔を出会い頭に殴り飛ばす。その者こそがリントの戦士・クウガなのだ。

メ・ガドラ・ダ「久しぶりだな。クウガ！」

クウガM「俺はお前に二度と会いたく無かったけどな」

メ・ガドラ・ダ「それでは覚悟しろ！二度とはい上がれぬ様にしてくれるわ！」

さあて。ガドラは非常に厄介だ。だったら俺はどうでるべきか、思考を巡らせる。

以前俺はガドラとの戦闘の際は、赤のクウガで戦った、そして倒した。だが奴は今こうして復活して俺と戦っている。今度は、色変え祭といきますか。

奴が鉄球を振るうと、俺はそれをバックステップで避け、近くの竹箒を手にする、青のクウガに超変身する。

クウガM「超変身！」

赤から青の鎧に変わり、瞳も赤から青に変わる。ショルダーアーマーの強度は少し失ってしまったが、自慢の跳躍力がこの青のクウガの自慢だ。

持っていた竹箒は青のクウガの専用武器へと変わる。俺命名龍の杖だ。

メ・ガドラ・ダ「青くなったか。だが変わったところで何も変わら

ん！死ねえ！」

クウガD「変わるんだなあ、これが」

跳躍力が向上することで素早い動きが可能となった俺は龍の杖を振るい、徐々にガドラにダメージを負わせる。

続けて距離を取った俺はゴミ置場にあった割れた水鉄砲を手に取り、緑のクウガに超変身する。

クウガD「超変身！」

ショルダーアーマーは左肩だけになり、青かった鎧と瞳は緑に変色。更に持っていた物も緑のクウガ専用武器に変わる。名付けて、天馬の弓銃。

ただし、緑のクウガの使用時間は異様に短い。なので俺は数発乱射し……

クウガP「超変身！」

紫のクウガへと超変身する。先程持っていた竹箒を広い、紫のクウガ専用武器の剣に変化。俺命名大地の剣。

クウガT「覚悟はいいか？今の俺の防御力は伊達じゃねえぜ」

ガドラの鉄球が俺を何度も殴打するが、固い鎧にひびさえ入ってはなかった。ただゴ集団相手だとひび入るけどな。

しばらくは剣と鉄球のぶつかり合いだった。ぶつかり合いと言っても、来る鉄球を剣でたたき落とすだけである。それだけでも俺は良かった。何せガドラのスタミナを切らす事に成功したからだ。

赤のクウガに戻った俺は、数歩下がり、肩で息をしているガドラに

向け助走をつけ、必殺技を打ち囃ました。赤のクウガの必殺キックだ。

クウガM「ウォリヤアアアアアア！！！！！」

メ・ガドラ・ダ「ぐああっ！！」

メアナは既に寮に帰ってしまった。目的は今夜再放送する時代劇が見逃せないからだという。

一夏と箒は花火を見るために人目を避け、蘭は団と合流。ついに一人ぼっちとなった魅御は境内の賽銭箱の横でひざ小僧を抱いていた。

魅御「……………」

彼女は人を待っていた。たった一人で。

その人は魅御にとって大切な人で、アイドルとしてでなくただ一人の女の子として自分を好きになってくれた。

その人は自分の趣味には正直で、臆せず生き生きと生きている。

その人は誰かの流す涙は見たくない、皆には笑顔でいて欲しいと小さい頃から現在まで願っていた。

その人はとても臆病だった。

やがて周囲に人気は消え、ついには一人ぼっちになってしまった。

ケータイの電子時計を見ると、8時手前になっていた。

魅御「……………遅いなあ……………」

ふと、彼女の脳裏に過去の思い出が沸き上がってきた。それは何年

前だったか、クリスマスの時だった。

それは今から何年前だったか。幼稚園に転入仕立ての魅御は今と違って、周囲と馴染めずにただ一人でウジウジとしていた。それが恰好の餌となって、虐めの対象ターゲットとなってしまった。ただ一人、そんな彼女を味方となってくれたのが、その人だ。

『おまえらやめろよな！かっこわるいぞ！！』

幼少期のその人は勇気があった。その人とその人の友人の一夏も自分を庇ってくれた。

『おれのなまえは、ひびききら！いのちのひびきにかがやくしゅらってかくっとうさんがいつてた。きみは？』

思えばその人……輝羅の独特の自己紹介は、その時からだった。当時の魅御はその意味を知らず、当時の輝羅も意味を知らなかっただろう。

とにかく彼は笑顔をとにかく好いていた。

その時から、魅御は変わりだした。突然過ぎたのか、周囲も、一夏も、そして輝羅さえも驚いていた。

今思えば、その時から魅御は輝羅を好きになっていた。

次の思い出は、中学に入りたての頃だ。

親しかった篤以外にも鈴という友人ができた魅御。同時にこの頃からアイドルを目指していたのは間違いない。

輝羅も後押しするように応援してくれた。その時の笑顔とサムズアップが今でも克明に思い出せる。

最後は中学三年の頃だ。

この頃には輝羅はクウガの力を手に入れ、魅御は見事にアイドルになり活動が始まった。

この時にはお互い意識していた事は確かだ。

鈴が別の中学へ転校する以前には既に二人は付き合っていた。

卒業式の日、戦いを終えた輝羅とこの日オフが貰えた魅御は卒業証書を入れた筒を脇に抱え、桜の樹の下で並んで座っていた。

『……こんな時代だけどさ』

『……んう？』

『俺、皆の笑顔……守れたかな？』

『……護れたよ』

『……え？』

その時魅御は輝羅の腕に抱き着いて、言った。

『ここにいるじゃない。私は貴方に救われた。貴方が守った笑顔第一号だよ』

『……？』

この時輝羅は幼稚園時代の事を良く覚えていない。だけど魅御はた

だ輝羅といれば良かった。

例え、進学先の高校が違えども、お互い心の中で通じ合っていると魅御は信じていた。

魅御「……届いているかな……」

顔を伏せているその時だ。足音が聞こえてきた。前方からゆつくりと歩む人物がいた。

魅御は顔を上げると、そこには待ちに待った魅御を救ってくれた男がいた。

輝羅「あー……っと……遅れて……ゴメン」

愛想笑いを浮かべながら右手で後頭部を擦る輝羅は会口一番、謝罪が魅御へと送られた。

すると魅御は立ち上がると、輝羅に向かって指を指し、命令口調で言った。

魅御「輝羅伍長！私を伍長の実家まで負ぶさりなさい！」

輝羅「俺伍長かよ！」

魅御「少佐命令である！」

輝羅「……はあ。了解致しました！少佐殿！」

ため息をついた輝羅は精一杯の返事を魅御へと送り、命令を忠実に

執行する。

夜空には満点の……とまではいかないが、いくらか星が見えていた。

輝羅「……………あれがベガにアルタイルにアルタイルって奴だな」

魅御「えゝ？見えないよ」

輝羅「ほら、あの三角」

その後彼等二人は、輝羅の実家に着くまで星の観察をしていた。

続く

第十二話 御祭（後書き）

次回

ギノガの猛毒

値に伏す輝羅^{クウガ}

それはフリーダムに影響が……

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【墮空】

第十三話 墮空

輝羅「めえん!!」

一夏「なんの!」

俺と一夏は今、剣道部の助っ人として練習に参加していた。因みに、俺の相手はクラスの女子Aに対し、一夏の相手は第だった。勝敗はもう分かるだろうけど、俺圧勝、一夏ボロ負けだった。

輝羅「おいおい、一夏。腕、廃ってんじゃねえのか?」

一夏「受験勉強で…」

輝羅「理由にならねえよ。俺は…まあ…紫のクウガの剣術練習に役立つし」

周囲に漏れない程度の小声で会話する俺達が解放されたのは、それから2時間後だった。

俺達は何故助っ人をやるようにしたのか。それは何を隠そう、生徒会長の意図だからだ。一夏はお試し期間だから各部活動一回しか助っ人で使用出来ず、逆に俺は本格的に助っ人として使われている。寮の部屋に戻ると同時に、俺のケータイに小岩さんから連絡が入った。

小岩く響さん、未確認です!>

輝羅「何ですって?!何号ですか?」

小岩<第二十六号…です>

つてこたあ、ギノガか。

取り合えず俺は返事をして、すぐに小岩さんが指定した場所まで移動する。

俺は一夏に一言残しておく。

輝羅「未確認が出た。行ってくる」

一夏「ああ。…そうだ、これだけは聞いておきたい」

輝羅「何だ？」

一夏「もしお前が死んだら……魅緒になんて言えば良いんだ？」

輝羅「そうだなあ。……俺は帰ってくる……とだけでも言っといてくれ」

そう遺言めいた 死ぬ気なんてさらさら無いが 事を言っ

た俺は直ぐさま向かった。

確か、メ・ギノガ・デっていやあ……

白い髪を長く伸ばしたオカマは、ビルの影で男の唇に自身の唇を重ねた。男はしばしア然としたが、突如苦しみだし、もがき、ついには倒れ、絶命した。

オカマ？「……あと……8人……」

オカマは姿を変え、未確認生命体第二十六号であるメ・ギノガ・デになると同時に横から衝撃が走った。クウガだ。

クウガM「だああああ！！！」

メ・ギノガ・デ「クウガ！？」

自身の敵を見付けたギノガは、臨戦体勢を取った。そして思った。自分の毒でやられるがいいと。

クウガM「いい加減にしろ！お前は……お前達は、そんなに位を上げたいのか？何で…何で殺す必要があるんだ！」

メ・ギノガ・デ「ああ。上げたいよ」

今更な疑問をギノガにぶつけた俺はギノガから返答が来ると同時に拳の応酬を食らわす。ギノガは流して避けるが、ギノガのドテっ腹にミドルキックが当たる。

ギノガは攻撃力こそは低いが、厄介なのは奴のモチーフともなっているキノコによる毒胞子。だが、それは奴の口から吐かれるものであるので、奴に捕まらなければ問題は無い。

それから俺は、キック、アッパー、回し蹴りのコンボを繰り返す。反撃とばかりか、奴は俺目掛け抱き着こうと襲い掛かる。

クウガM「怪人^{グロンギ}に抱き着かれるなら男に抱き着かれる方がまだマシだったの」

内心毒づく俺だが、攻撃の繰り返しでスタミナが減っていく。逆にギノガはピンピンしてやがらあ。

もう何度奴にパンチやキックを浴びせたか、覚えてはいない。必殺技を受けさせようにも、奴は一行に弱まらない。

突然。俺の背後で、母親とはぐれたのだろう、幼稚園児ぐらいの子供がそこにいた。

クウガM「逃げる！逃げるんだ！」

「よっ、四号！？」

クウガM「早く！！」

子供に気を取られた俺は、誰かに両肩を捕まれた。それが誰かはすぐにわかった。ギノガだ。強制的に俺を振り向かせ、俺の口へ直接毒を吐いた。

未確認生命体第二十六号。メ・ギノガ・デは、自分の体で生成した毒を未確認生命体第四号ことクウガはギノガの毒に侵されていた。既に立ち上がる事も出来ず、痙攣を起こし、ついには変身が解け、元の響輝羅の姿に戻った。

それから、警察である小岩が駆け付け、ギノガは小岩には目もくれずに、その場を去った。

小岩さんに連れて来られた、俺織斑一夏と箒達、そしてメアナに魅緒はある病院の奥深い部屋へと通された。

そこには、俺と同じ位の大きさの物が横になって上から下まで白い布が被された。

千冬姉が小岩さんに許可を得て、白い布の一部分を取った。そしてその下には……

魅緒「嘘……でしょ……」

俺達が見慣れた顔で、さっきまで生きていた……

魅緒「…輝羅!!」

俺の親友の響輝羅だった。

メアナ「お兄ちゃん!……お、にい……ちゃん……」

魅緒とメアナは嗚咽を漏らし、箒達も友人を亡くしてか涙を流していた。そして気付けば俺も涙を流していた。

一番身近だった存在が、今こうして死んでいる。

小岩「申し訳ありません!二十六号に……二十六号の…毒に……」

警視庁の小岩さんが、俺達に向かって土下座で謝罪した。しかし魅緒は、殺気立った表情で小岩さんの胸倉を掴み、無理矢理立たせて怒鳴った。

魅緒「返して!!返してよ!!……輝羅を……輝羅を返してよ!!!!」

千冬「園田！」

第「待て、魅緒！落ち着け！」

千冬姉と第が魅緒を抑えつけ、小岩さんは身なりを直して今回の未確認についての事を教えてくれた。

まず二十六号のターゲットはいずれも男であることと、歳が高校生以降ということ。そして、どの人も黒髪だという事だった。これには小岩さんも入ってしまう。

小岩「響さんは、ターゲットに私も入ってしまうという事で、退いてくれと言ってきました。あの時、私は無理でも……無理にでも……」

小岩さんは悔しそうに地面を何度も何度も拳で叩いていた。

輝羅の性格上、無駄な犠牲を出さない、誰かの流す涙を見たくない、そして何より笑顔を守る。俺が知っているのはこのくらいだ。

あいつはよくよく無茶をする。たまに暴れる事もあるが、それでも笑顔を守りたいと言っていた。

それが今、それが断たれてしまった。

寮に戻った俺達は、取り合えず二十六号についての対策を練った。

厄介なのは二十六号は毒殺という手法で人を殺し続ける事。そのやり方は人間体怪人体関係なく、口移しで殺害するという。

即効性の様で、クウガに変身した輝羅もそのように……

二十六号については、ラウラの黒ウサギ隊の衛星でキャッチ出来て

いる。

一夏「作戦はこうだ。まず、囚が二十六号をアリーナへと誘い込む。アリーナまでは二三人程護衛が必要だ。誘い込んだらアリーナでＩＳで撃つ……という作戦だが……」

駄目だ。とにかく駄目だ。

何考えてるんだ俺。

千冬「……その作戦、上手く行くとでも考えているのか？」

終いには千冬姉にもツツコミを……あれ？

一夏「ちふ……じゃなかった。織斑先…生？」

千冬「響の弔い合戦……良いだろう許可する」

六人『はいい？！』

あっさりと言っているのか千冬姉。でもこれで、心おきなく輝羅の敵が撃てる。

千冬「ではこれより、織斑の出した貧弱な作戦を本に新たな作戦を下す。それと、この作戦が終わったら全員反省文を提出するように」

とある病室。そこには横たわった輝羅がベッドの上で安らかな表情をしていた。彼は生き絶える寸前に三度ほど電気ショックを浴びた。その影響だからか、彼の死体の周りを稲妻が走り、右腕のフリーダ

ムとベルト：アークルにも影響していた。

しかして、それを知るものは、監視カメラを覗く者以外は誰も見ていなかった。

頭に機械的なウサギの耳を付けた人物を除いて。

続く

第十三話 墮空（後書き）

次回

誘い込まれた未確認生命体第二十六号
メ・ギノガ・デ

窮地に追い込まれる一夏達

そして、あの男が蘇る

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【復活】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0938t/>

インフィニット・空我・ストラトス

2012年1月8日22時45分発行